

証雅の柳川



麻生路郎☆主宰



十一月號

No. 390

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

12月本社句会

口八丁
足ぐせ
下ライ
過去
兼題

川柳雑誌社主催

文化の夕

文化の秋です。

今宵ひととき、川柳三昧にひたる
幸福をみんな味わいましょう。

日時 十一月七日(土)午後六時

場所 文楽座別館四階

市電道頓堀電停南へ二〇米西側

市電日本橋一丁目電停北へ百米西側

(入口は右側から階段を上ってください)

兼題

「アリバイ」(三句) 北川 春 渠 選

「若主人」(三句) 清水 白 柳 選

「貧乏」(三句) 丸尾 潮 花 選

「後悔」(三句) 八木 摩 天 郎 選

席題 三題(当日発表)

中島 生々庵

柳話 呈賞 ☆各題天位 ☆「アリバイ」天位に不朽詞賞

会費 百円

幹事 紫杏・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・

与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・水断・一三天

★投句だけの方は郵券三千円

同封(切十一月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

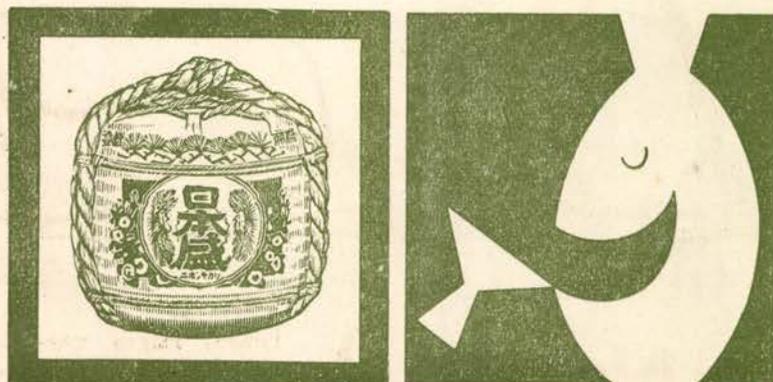
川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一

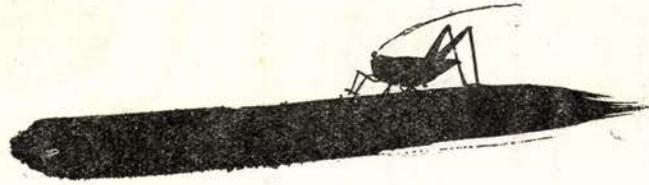
日本盛酒坊

和やかに ます一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀南詰



灘の清酒
二ホンサカリ



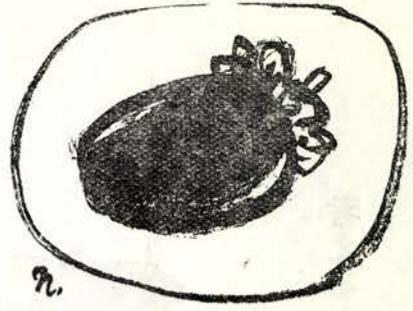
考える人となりたまえ

— 路郎

川柳雑誌 11月号 目次

とびら……………	麻生路郎……………	(3)
ある俳人と川柳……………	堀口塊人……………	(12)
楽しかったひととき……………	石曾根民郎……………	(29)
月へ行く道……………	高鷲亜鈍……………	(16)
秋風に趁われて……………	速見真珠洞……………	(32)
短詩文学作品展……………	橋高薰風子……………	(40)
猛台風災難記……………	東野大八……………	(14)
集	尾崎方正……………	(26)
特	山川阿茶……………	(27)
わが獨身の句……………	野村味平……………	(27)
川柳名句と難句……………	麻生路郎……………	(4)
話にならん……………	前田伍健……………	(33)
★山川見句抄……………	(34)	
★山川見の死へ……………	富士野鞍馬……………	(20)
★夫を大事にする運動……………	藤村梨花……………	(30)
川雑婦人友の会五周年祝賀句会……………	三夫……………	(28)
★不朽洞会の人々……………	三夫……………	(28)
川柳塔……………	麻生路郎選……………	(6)
同舟近詠……………	諸家……………	(11)
近作柳樽……………	麻生路郎選……………	(20)
金泥集……………	北川春巢選……………	(40)
柳界展望……………	麻生葭乃選……………	(39)
★不朽洞会から……………	市場没食子選……………	(38)
一路集「返信」……………	小川恒明選……………	(36)
「事故」……………	石川侃流洞選……………	(37)
研究題「塵」……………	戸田古方……………	(34)
ペンの散歩……………	戸田古方……………	(46)

題字……麻生路郎・表紙……野尻 弘



川柳 名句と難句

麻生路郎

利いている。

〔三三二〕

灰皿になって戻ったうどん鉢

(宏方)

戻ったという語調から考えると、この句を擬人法の範囲に入れてもいいだろう。

このうどんの鉢に若し靈あらば、実に人間という動物はエティケットを知らぬにもほどがあるとフンガイすることだろう。誰でも、こんな情景にたびたび触れることはあっても、これを句に取りあげるまでにはなかなか至らないものである。軽い穿ち味がこの句を盛りあげている。

〔三三三〕

律義者どの寫真でも手を重ね

(春渠)

写真をなぐさみに写すことはムダな費用だと考えているのが、律義者の通有性のようだ。

何かの時に人から撮ってあげようと云われれば撮って貰うに過ぎない。その外の写真と云えば小学校や中学の卒業記念か同業の集合写真ぐらいなものである。従ってポーズもクソもない。どれを見ても、端の方にやや堅くなって、手を重ねた千遍一律の姿を発見する。もう少し何んとかならぬかと思うが、どうにもならぬところが律義者

〔二九〕
窓ひとつひとつに人間がいるクレオン

(水客)

こどもはある意味の詩人である。画をかくにしても、直截である。素直である、イメージをそのままに、紙の上に映しとる、

下手な技巧は一切しない。色彩にしても形体にしても実に自由だ。この句のクレオン

画もこどもの印象が、そのまま紙の上に描

がき出されたことに感服したのだ。窓の一

つ一つに烙きつけられたように人間を描いた画は大人に画けない。句としては児童心

理への一つの発見である。

〔三〇〕

アレアレ内のなめくじはマチス派

か (粗影)

フト、壁面を見たら、なめくじが匂いま

わたたあとが、まるでマチイスの画をつく

りだ。それはなんとという素晴らしいことだ。人間ワザでは斯うまではいかないと驚

いたのであった。上四の「アレアレ」が驚

ろきと贊嘆の入りまじった表現として実によく利いている。

マチスの画を理解し得ない人でも、この

なめくじの句から逆にある程度の想像は出

来よう。尤もマチイスにとってはありがた

くない想像ではあるが、この句はマチイス

の芸術を非難しているのではなく、なめくじの無技巧の作品に驚異の眼を見張ったのである。

しかも、内のなめくじという表現を用いた作者の平静な心境に思い及ぶと、なかなか興味深い。次にマチイスのことを少

しく述べておこう。

マチイス (Matisse, Henri) は一八六九

年に生れたフランスの画家で、画風は非常に強烈な原色と形象の単純化による率直な

表現が特色として知られている。特に印象派から後期印象派に続く色彩の用法を継承

して、色面の対立で空間を形成し、透明華美

な裝飾的手法であるから、この句の作者の

主観が「マチイス派か」と詠んだのである。

〔三三一〕
仲人をして胃袋を驚かし

(南牛史)

いつも粗食に馴らされている胃袋が、た

またま胃袋の持ち主が仲人をして山海の珍味をたらふく胃袋へ送りこんだので、胃袋が驚いたのである。

擬人法で詠まれた奇想天蓋の句だ。この句の構成上「仲人をして」の上七がウンと

の姿なのであろう。

〔三三四〕

ところてん突くよに産んで皆育ち

(夜潮)

家庭経済と睨み合わせて産児制限をして
ている時代に、これは又「ところてんを突
くよに」続けさまに子を産み、それが、皆
すくすくと育ったというのである。何んと
なくニューモアが溢れている。

子どもは天のさずかりものだ。中絶なん
かするもんじゃないという思想が、地方で
はまだまだ根を張っていると見ていただろ
う。

〔三三五〕

荒神さんの座りやはるとこない電

(ひか平)

近ごろの台所。ソレ電気冷蔵庫だ。ソレ
電気洗濯機だ、炊飯器だと、電化、電化
で、台所に鎮座しました荒神さんの座ら
れるとこが無くなったというのである。

この句、一読コッケイでもあり、皮肉で
もある。

くすぶった台所で、へっついさんの神様
だったのが時代が移ったためへっついさん
さえなくなり、電化、電化で居るところが
なくなったのである。オートメーション化
で人間のいるところさえもだんだん狭ばま

ってゆくのど似ていて笑えない現実味を持
った句だ。

〔三三六〕

カクテルも習い飲んで嫁ぐ気か

(水泡)

近ごろは家庭に、洋酒棚を設備して、夫
が帰宅するとホームビアを開いてサービス
する奥さん方が殖えたそうだが、この句は
若い娘さんが、カクテルの合わし方などを
習っているのを詠んだのであろう。

ドライな今の娘気質を冷嘲した気味も含
まれていて面白い句だと思ふ。「飲んで嫁
ぐ気か」とつき放した表現も巧い。

〔三三七〕

直ぐそこと言うに分教場見え

(宵明)

地方の分教場というものは、かなりのへ
んびにあるものだ。 たまたま、その教師を訪ねて行こうも
のなら、途中で、何んべんか道を見ねなけ
ればならない。

「直ぐそことですよ」
と村人が教えてくれたが、すぐそこどこ
ろか分教場の建物すら見えないものであ
る。そこをつかんだのが、この句で穿ちの
句として成功している。

〔三三八〕

ラッシュアワー女はしゃべる性さが
りき

(保美)

車の中であっても、女はよくしゃべる。彼
女たちにとってはしゃべっている自体が幸
福なのであろう。

車内で押されながらも、そうした女の姿
を穴のあくほど眺めているのが男性であ
り、女のしゃべることを彼の女のサガであ
ると簡単に結論を与えようとするのも男性
である。

〔三三九〕

捨てられて舞台が夫などという

(清生)

アクトレスが恋愛から結婚へゴールイン
する。ところがしばらくすると夫なる人が
他の女へ愛情を移す。たちまち喧嘩、たち
まち離婚という予定コース
を辿る。

その時の言い草が、
「捨てられたからって悲
観はしないわよ。わたしに
は舞台という夫があるん
ですもの」
である。しかし、どっか
に一抹の寂びしさは感ずる
に違いない。そうした多く

の女優達はやがて第二の恋を趁い、第二、
第三の求婚へ走るのが定石のようだ。しか
し、それが人生というものだろう。

女房に買われたまんま老い

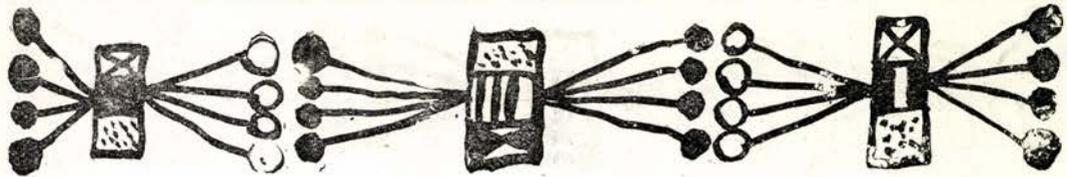
(遠二)

「今はこんなにしていても、今にうちの
人はノスにきまってる」
と思うのが、世の多くの主婦たちの夢で
あろう。イヤ、夢でなく、必ずそうあるこ
とを信じて連れ添っているようである。

しかし、この句のように、買われたま
まで老い込んでゆく亭主がいかに多いかを
思うと背筋が寒くなってくる。この句は表
現上には何等難がないが、柳樽式の句いが
濃厚なだけに少しく新鮮味を欠くらしいが
ある。



あやめ池大菊人形
11月29日まで
忍術絵巻見流し23場面
円型大劇場 OSK秋のおどり
グラントミ 猿飛佐助 全20場
ユージュカール ほか 動物園 博物館 遊戯具 など
近鉄・あやめ池駅下車すぐ会場
あやめ池遊園地



豊中市 戸田 古方

上げ潮にさからいかねているヒトデ
旅の絵の色エンピツは足らぬまま
凩過ぎていたと室戸の旅だより

大阪市 西尾 栞

男好きのする顔などと下心
齢五十むしように浮気してみたし

大阪市 市場 没食子

臍くりとおんなじ様に妻肥り
外勤へやれやれ秋の彼岸が来

西宮市 若本 多久志

飲まずだけ飲ましまつすぐ去になはれ
心斎橋和服の男見つけたり

大阪市 正本 水客

腹立てて喰べりゃ御飯が早ようすみ
灯を消して虫きく父は古稀近く
名月を褒めてる恋ははかどらず

大阪市 正本 水客

洗い髪おとこに見せるためでなし
捨て石になると成算ありはあり

骨とうもみな偽物という落目

大阪市 丸尾 潮花

また聞きの噂を女もちあるき

本当のことが喋れるビール呑む

兵庫県 小西 無鬼

町議早々

判らないところは静かな頬かむり

種牛の寿命は少し延びるだけ

大阪市 武部 香林

分解掃除したらと脳みそをこづき

長いものに巻かれて大臣とはおかし

ホノルル市 築山 快夢起

天皇の代りに教祖の額をかけ

校長が大神様を説き始め

持つ者の悩みデノミダインフレだ

料理講習お蔭で電化せびられる

大阪市 須崎 豆秋

青春のコーラスビール林立す

掛軸へ二百十日が揺れはじめ

ストロブにも扇風機にも遠い椅子

ワイマル 羽佐 間柳 栞

易や卦を病人非科学的に見ず

忍従の美德で今の世は食えず

奈良県 尾崎 方正

座布団へタイトスカートの眼は怯え

勤評をよそによい子に育てあげ

憂しと見し身も優曇華の晩婚の

堺市 吉田 圭井 堂

新築に米でせしめた軸を掛け

親を見て貰った筈の嫁がこれ

毒舌でならし貧乏でもならし

山口県 国弘 半休

共白髪癖は言うまい構うまい

凩と言う海の表情冷たいね

人間の臭いを捨てに立つ夜風

防府市 長野 井蛙

持参金子を説き伏せてピンチ抜け

酒の出ぬ席は代理で事を足し

電化して残る煙りのない別れ

物乞に一円出せばつき返し

岡山県 直原 七面山

浮き苗を直すも老いの一徹さ

リズムカルにあんたと呼べて世帯じみ

月の夜を添えない人に見送られ

一そパチンコ屋に就職したらと妻むくれ

用心が水も泳げぬ子に育て

母さんの方が保母さんてこずらせ

一瞬を惜しむが如く抱く二人

大阪市 西森 花村

ドブ川の底にも秋の雲光る

老人の日があり老人くたぶれる

秋であるキリンの耳がそうかたり

二つ三つこぼれてきそうな星月夜

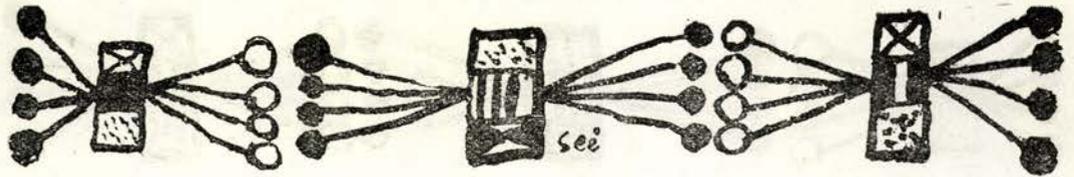
秋風に初老肋骨数えられ

鳥取市 河村 日満

無いものにして恩給を蓄めたがり

運転は俺が俺がとスト解除

東京タワーにて



宮城を見下ろす空の上に居り

倉敷市 木村 千容

何処へ行く水か競り合いせぎり合い

絵日記へ従兄弟の顔を画いてけり

秋虫を捕え図鑑と首つびき

加賀市 野村 味平

これが恋かと智恵子抄を伏せ

二学期が始まる頃に新仏

まま母は折れるとこまで折れて見せ

大阪市 木村 水堂

年上の妻でお隣り睦しく

市場籠提げて出るにもパフはたき

高槻市 福田 丁路

ツンとして帽子をとらぬ令夫人

名月をほったらかして呑み明かし

大阪市 真鍋 一瓢

ビンの色毒薬めいたとこもなく

子沢山着るやりくりも秋のもの

大阪市 後藤 梅志

床の間にうちわがあるもあつもの

月祭々踏切小屋が寝しずまり

米子市 小西 雄々

飛出して見れば霊柩車のパンク

風鈴もつとめはたした秋の風

浅学を子の宿題のときに恥じ

停年の弱気を妻にとがめられ

大阪市 山川 阿茶

定吉もよせて貰うたかくれんぼ

こいちゃんの荷物一丁ほどつづき

お家はんへへいさいでやすさいでやす

番頭に奥へ云うなど釘さされ

こいさんがひいきあたりの眼が光り

大阪市 金井 文秋

年子です同じ雑誌を二冊買い

子供抱く夫の仕事一つ増え

宿替えにがらくたをまた積んで行き

加賀市 那谷 光郎

蚊帳を出る立膝歌唄めく姿

ソフトクリームとけて縁談まだしぶり

倦怠期いや味ばかりで用を足し

大阪市 北川 春巢

マンガ本読んでる時は咳が出ず

夏やせの身で夏やせを診察し

子の病氣我が家の狭いのに気付き

観光バス歌舞伎は廊下だけを見せ

贈呈を受けた自叙伝飾りにし

岡山市 浜田 久米雄

コマーシャルすぐに美人になれるよう

定年へひめくりはらりはらり減り

秋たのし一升瓶の栓を抜き

老眼の二号活字にそり返り

岡山市 逸見 灯竿

会釈された顔が夕刻ごろわかり

独身は酔うたところで寝るときめ

壁一重テレビ見に来いとも言わず

宣伝の力貯金を引出させ

大阪に大阪弁の孫が居り

大阪市 清水 白柳

いさこうたあとのせんべい湿って居

髪をなびかせて女速くを見つめる

上敷きを拭いて吾が家の芽出度い日

言い負けた方が枕をひきよせる

出雲市 尼 緑之助

瓢箪のおおさを着にしたね酒

ひとひら大きく落ちて声も出ず

京都市 大鶴 喜由

スピッツに安易に捧ぐ唇なるに

奥様のけだもの振りを蚤が知り

老いの気のしゃんと歩くが老いらしく

畳みかけて聞くとこ見ればちとくさし

尼崎市 小林 文月

アルバイト電灯の位置少し変え

大阪市 岡 淡舟

大阪でへつらう事を教えられ

男の子であつたらと云う娘の勝気

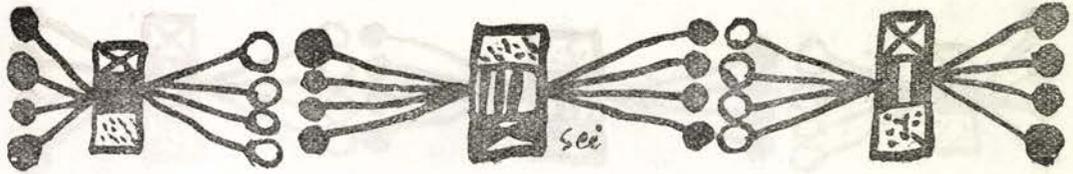
奈良県 西辻 竹青

良心はやっぱり届けて出るときめ

落選の為めにか妻は捨てられる

岡山県 福島 鉄児

女とは良いな素裸でも嫁ぎ



岡山市 服部十九平

善人の立腹日記へだけ書かれ

頼りない味方スパイに金を借り

パチンコで妻とその日の技を競い

八十の元気単車の尻へ乗り

尼崎市 長谷川三司

嫁がして夫婦へ朝の菊匂う

嘘の口拭くハンカチのしらじらし

熊本市 有働菜春

親友じゃないかと金のある間

ぎょろぎょろと深夜喫茶に慣れてる瞳

テレビ買ったら寺小屋の様になり

大阪市 山本葉光

母だけの子の求職にいきどうり

我が生きる無駄を孤独の夜の底

岡山市 田村藤波

敏深い顔に白粉塗る不運

精霊に刈り残しとく仏花

ロマンスを語る養老院の月

岡山市 岡田夜潮

夏上着抱えてまわる物ときめ

自殺でもしたら俺の名知るならん

茨木市 下山清潮

ぶしょうひげ今朝も子供に指摘され

俺の子が水泳選手になろうとは

老妻は婦人会婦人会とバスにゆれ

見島市 本田恵二朗

遠方へようやりはったと母同志

希少価値あわれ盆栽こましゃくれ

胸を張れ胸を張ろうとひとり言

京都市 松川杜的

世の浮沈さまざま尾灯淡れ行く

親子して三曲合奏の出来る幸

鳥取市 森本法泉子

社宅今倉庫に月をさえざられ

父親の看護は邪魔をするばかり

入院の矢つ張り鉢巻しめる癖

岡山市 津田麦太楼

灼熱の天に挑どみてカンナ燃ゆ

品をして三面鏡に蔑げすまれ

しょんぼり保釈二号に迎えられ

吹田市 橋本幸男

病院の窓から名月見る身なり

眼帯をしてまでパチンコやめられず

方正氏の結婚を祝して

人生は楽し六十路の初婚なり

堺市 高崎雄声

味を言う子供に育ててあまし

赤電話はたへ憚かる声になり

島根県 藤井明朗

台風が去って大臣見舞に来

センチなど嫌い親をはらはらせる恋

岡山市 永松東岸

パパさんをうとんじている忙しさ

牛だけが保険に入っている暮し

紅一点先に帰してどじょすくい

パーチカルポンプすえれば雨になり

倉敷市 野田素身郎

特選の裸婦離れてみ近くで見

バスガールの営業用の標準語

さすが秋あの娘がセンチな手拭くれ

長の旅今度は週刊女性買い

大阪市 伊達堰子

リンペンの踏んで通れという寝ざま

串カツの立食い生徒に知れわたり

空も秋無銭旅行の暇がほし

尼崎市 坂田東洋男

長女退院

ハイヤーに乗るので末っ子ついて来る

退院が他人行儀なことを云い

退院で制限といってくれた酒

大阪市 不二田一三夫

小販東映類焼

本番という火が銀幕焼き落し

売店廃業

ラムネなど抜かせた右手いとおしく

売店のおっさんだった語り草

兵庫県 酒井ひか平

干し柿よこれが男の末路なる

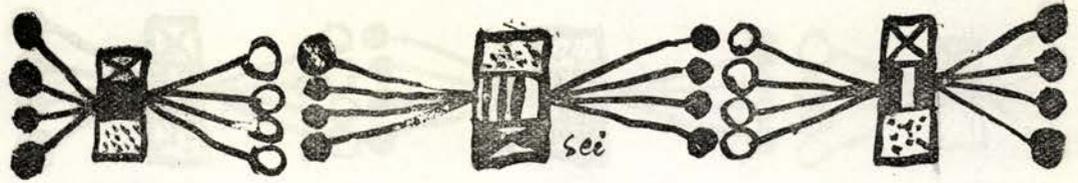
意識して見せるチラリに引っかかり

大阪府 深見雅堂

有楽町歌みた様な恋も無く

ピンボケの写真も帖った子沢山

世話やかん奴ばっかしが批判をし



竹割った気性で女実業家

バスを待つ足もリズムのハイテン

京都府 松下京 一楼

ゴルフバス団地尻目に砂塵あげ

鍋さげて出ればヒョコがあとやさき

宇部市 津 秋 六 花

宿題へ先妻の子が出来すぎる

お役所が下から出たで恐いなり

神戸市 丸 川 初 甫

大文字より舞妓が見たい四条橋

百万円当るピラなど踏んでゆき

人権蹂躪家裁で丸められ

岡山県 戸 田 喜 楽

顔の皺一ツ一ツに苦がにじみ

恩給がつく寸前に癌を病み

岡山県 池 田 古 心

観光バス飲んで唄って嫌になり

東京都 石 居 高 志

整形の之も美術の秋かいな

浜寺海岸にて

吾が心に似たり晩夏海は荒れ

潮騒の此所にもリズムあつたるか

大阪府 早 川 清 生

柿の苗送れと移民一年後

農家から古文書学者借りたまま

荷物車に乗務茶瓶を一つ提げ

湯治客引揚げサロンパス残る

大阪市 武 部 若 菜

私だけの鯨尺にて着物縫う

夫老いぬ丸菓のどに引っかかり

或る米国人

お月さんにさわりよつたと腹を立て

堺市 辻 圭 水

徹夜をば言わず昼寝をうらやまれ

たった一言何年かの苦労水の泡

工員と思われたくない服を着て

商魂は季節感さへ狂わせて

加賀市 中 松 恒 雄

精神科世間話で診察し

孫出来てからへそくりが減り始め

靴すべる豪華な廊下にとまどいし

岡山県 野々口 美 舟

女房の心月末につかんだり

前おきをして動評を非難する

西宮市 小 浜 牧 人

退院ときまりはがきを買いにゆく

パラパラと時雨れて香具師は銭を読み

愛用のパイプも長い庶務勤め

よさこいがお得意部下に慕われる

派出婦も呆れるほどに敷かれてい

年聞けば十九情婦があると云う

物凄いいスリルが欲しいアイシヤドウ

西宮市 菱 田 満 秋

ああ夕焼よ満洲の野を想い出す

兵庫 前川 左 文字

五十キロの風景語じて通い

豊中市 岡部 三十郎

月旅行やっぱり僕は後で行く

紅一点皆なが虫に見え始め

風景の中にアベックとけこんで

大阪市 橋高 薫 風子

叱られた子の部屋にまだ灯が点かず

これもおやすみなさいで終つてる恋文

男はつらい逢瀬と云うておき

下関市 中村 九 呂 平

本心と別な表情して下り

来て見れば民謡ほどでない情緒

終列車一駅毎の空席よ

バスガイド凸凹道を笑くほにし

新しい墓いくつかを見て墓参

貫禄がついて血圧ドック入り

大阪市 池 戸 桃 村

めかして顔へ淋しさ言うてくれ

牧師様日本びいきの顔をする

引のある入社倉庫も大学出

米子市 石 坂 新 雪

すぐ後で悔むくせしてやりたがり

不敵なり親にウインクして見せる

釜ヶ崎風景

オイチヨウ(八)やカブ(九)やと目くそけのまま

働いて食えず遊んで楽に食え

鳥取県 田中 蛙 眠子



大原女がしわがれ声で餅買わず

デモの道葬儀へ七分あけて待ち

もう東京かいな空気枕は旅馴れる

名古屋市 野田一念

露路裏の朝顔傘の骨に伸び

フランスの空で秋刀魚を喰べたがり

神戸市 仲 どんたく

リーダーの如くしゅうとめ耳を立て

しつとりと近視の娘見つめたり

こおろぎが静かに物を思わせる

ビールを酒に乗りかえさせる秋の風

平田市 久家代仕男

世辞一つ言うにも女抜け目なし

託児所でやっと支えて居る寺院

カラカラと笑える女史に子が無くて

井の蛙泳ぎ疲れて涙み出され

大阪市 本多柳志

いづも屋がもてば素直な鰻なり

何を売るつもりか香具師の政治論

仲裁は大阪弁で丸う行き

出雲市 原 独仙

簡単に墮せ墮せとは男子

その弱気仲人さんのお気に召し

魚住まぬ川に立つのも秋のこと

同名の人が旅館で死んで居り

岡山市 江国幽谷

大阪市 大谷月都

女事務みんな男が欲しい顔

刑務所は立派やなあと子がぬかし

課長さん象牙のパイプの艶を出し

岡山市 光好陽子

これほどの誠意通じぬほどひがみ

一徹な気性へ廻り椅子が来ず

手相見て貰うに市場籠をさげ

西宮市 河相すゝむ

東京東京と云うのがいささか氣にいらす

退院の横着ぐせを捨て余し

西宮市 野呂鶴汀

気楽さが我が子の死んだ日も忘れ

都市計画で表通りへ出た長屋

六十の地位とお金へ惚れられる

西宮市 樋口舟遊

光陰を惜しみパチンコ屋で暮れる

妻欲しいと思う日あり米をとぐ

新潟県 高野むじな

春夏秋冬先生もストが好き

開襟で来て蝶ネクタイを宣伝し

上役の悪口も云う社交術

当分はビールの方がよい残暑

長野にて

坐り直して先輩も師を語り

大阪市 榎 蘭

開米を十五年間も担いだり

大阪市 石倉旅風

八の字に眉を寄せよせ金を貯め

私生活社長さびしい影をみせ

大阪市 魚住満潮

お金の利息にお妾サンまで奪られ

大大阪一坪僕の土地が無し

拾一貫五百仙の顔に似て来たり

堺市 田中狂二

秋風に寂し夜店の灯のまばら

秋夜長すみきる空にみおつくし

大阪府 林 昌男

義理で出す涙ハンカチ当てただけ

言訳を信じてくれてこそばゆし

ウインドへ女心はまだ変り

愛媛県 村上旭童

絶対に損はせぬ気の未亡人

その先に何があるのか蟻の列

倉吉市 大前鳴恍

日傘までさしかけられて聞く苦情

目薬をさしてテレビの店へ立ち

運動会老いを走らす稲の出来

鳥取市 北村三歩

機密費の方にも組合触れたがり

この辺で親父の折れて来る予定

感違いらし金の相談までもうけ

神戸市 傍島静馬

気前よく座席譲って足踏まれ

綺麗好き賞め賞め家賃上げて去に



履き上手だんたとえ靴買わされる

汚なそに車掌手巾つまみ上げ

笠岡市 木山 遠二

囀らず喋ってばかり居る雀

百姓へ疊は横になるところ

いつの間か造花埃になって居り

大阪市 村山 光輪

女房に言われ疊を替えるとし

給食のパン鳩小屋へそっと入れ

大阪市 平沢 保美

弟の通訳出来る女の子

日曜日妻と朝刊分け合って

生花で細々疎開したまんま

姫路市 植村 客遊子

痛そうな枕で寝てるオジイチャン

蟬とりもせずデパートで間に合わせ

大阪市 河井 庸佑

信心でなおったものと信じこみ

石川県 同村 虹要

ビール一本分神さまの寄付値切り

印刷やないかと凶のみくじ捨て

プロポーズ月給はサバを読んで置き

実力行使孫に菊の葉むしられる

大阪府 谷沢 好祐

九々よりは早く覚える背番号

盆踊り私も熟していますのよ

泉大津市 高津 徹也

取調べへ男勝りはうそぶいて

愛媛県 榎 紫光

盆踊りお墓参りもせずに行き

お世辞まにうけて女優をすべって来

異性からもてる秘決を妻に聞き

青森市 工藤 甲吉

亭主抵抗弁当を持たず出る

校長は悲しからずやひとりぼち

ムシロ旗立ててピースをのんでいる

死ぬことをあきらめてからスリになり

甲子園までピッチャーのお母さん

玉野市 伊原 明林

はたきかけながら機嫌を子に見られ

デパートであなたあなたを恐ろ聞き

憤然と坐ればクッションやわらかし

借金を断わる役で社に勤め

面白い人で恋にはならぬ

西宮市 門永 三舟

国敗る蘇州の柳思われて

納涼の風鈴その気で聞いている

同舟近詠

松山市 前田 伍健

高下駄ですし屋は荒い水つかい

名妓とか七十にして髪容ち

せっぱ詰って善悪の性を見せ

スクラムを組んでる上を赤トンボ

草野球外野用なく手を叩き

大阪市 橋本 緑雨

住み馴れた路次の奥なり裸で居

廊下まで来て立話する仲よ

須坂市 高峰 柳児

場時計内緒話しをあわてさせ

すぐに妬く二号近所を憚からず

しめっぽい話題で福祉課今日も暮れ

飲けるのが取柄にされてる姐芸者

今治市 長野 文庫

宣伝を狙い煙突不相応

お隣りのことを八百屋にさぐらせる

非情にもマイク泣声まで入れる

第三者には間抜けだと思ふ怪我

死んだのでそのままになるコレクシオン

百歳も生きて市長が弔辞読む

ひやかしの様に大往生と書き

和歌山市 秋月 宏方

庭石自重台風きても微動せず

人生の苦勞白髪にまだ続き

婚約中つまり人生予告編

くつわ虫ジャズの世界の先覚者

大洲市 米沢 曉明

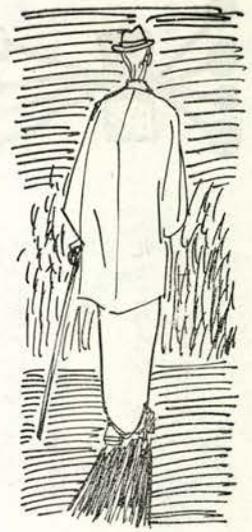
女事務エプロン掛けてからが親

玄関で肚を合わして通される

代議士よ空の広さを御承知か

そうだったのかと教師も涙ぐみ

追う程に蛙飛び込む奥座敷



ある俳人と川柳

堀口塊人

長家中昼飯時と成にけり

燕村

昔でも今でも、俳句を作る人は必ず川柳も作っている。いろいろの句集をしらべてみて、私はそう思う。たとえば、松尾芭蕉の辞世と言われている。

旅に病んで夢は枯野をかけまはるにしても川柳である。この句の結びの三字が「めぐる」か「まわる」かについては、かつて私の意見を發表した事もあり、私は今でも原作は必ず「まはる」であろうと思つてゐるが、今では、みな「巡る」にしまつてゐるようである。ここでそれを論じていると長くなるので省略する。そして私はあくまで「まはる」として筆をすすめる事にする。

これは叙景ではない抒情の句である。枯野が対象ではなく、旅に病んで死に直面した者の述懐が素材である。枯野はその形容詞であり象徴化されたものである。枯野の季節が句の重点となつてゐるのではなく、句の主眼はあくまで、人間としての感情である。「名月や池をめぐりてよもすがら」などの自然を中心とした俳句とは異なつた作品である。非人情の境地による諷諷がなく、人情味から生れた作品である。即ち川

柳である。
夜半亭蕉村の十三四忌の追福として出された俳諧集「其雲影」のはじめの百韻には次の様な句が發表されている。

腹立た帯は左りへ廻り過

燕村

ごろくといつ子宝になる事そ

同

及なき人を見初る松の内

几圭

見返りくよいとしをして蹴つま

燕村

つき
さかやきを半分剃て悔みうけ

几圭

つづく歌仙の中からも次の様な句をとつてみる。

父上のお江戸詞を笑ふ也

几董

追従に己が威勢をとり交て

几董

ほとゝきすかはかり腹の立時に

同

長尻か借りに来た物置で行

同

これは「川柳点の万句会」でもなければ「柳梅」の中に集録されたものでもない。今では俳人と称せられる人の作品であるけれども、古川柳と区別がつかないほどよく似てゐるのではないか。「長尻が借りに来た物置で行き」など柳梅の何篇にあつても、堀ちがいのように思われたいではないか。かかる傾向の作品は「其雲影」ばかりでなく、蕉門十哲の句集の中から、それを求めるのに、さして苦勞をする必要はない。それから昔の俳人はかりでなく、虚子をはじめ現代の俳人の句集からもそれを指摘する事が出来る。私は公開の席上で度々実例を示して講演している。これは不思議でも何でもない。俳人といえども人間である。人間であるからには、人間としての感情がはたらく時があるにちがいない。その時そのままを十七字調にすれば、本人はそれを意識しないにもかかわらず、川柳のようなものが出るのである。

しかし、私は、正岡子規だけにそれがあつたまいと考へてゐた。それは、あれほど

月並発句を排撃し、川柳をきらつてゐた子規として、意識的に注意深く、そんな句は作らなかつたであろう、と想像してゐた。現代の俳句の祖は子規であり、現代短歌の祖も亦子規であることは、文学史上明白なる事実であるが、川柳には何の關係もあるまい、と考へてゐた。その「俳諧大要」の中でも、川柳は軽くあしらわれていたし、同時代に新川柳を唱導した。阪井久良伎の文中にも「子規は四国の山猿云々」の一節があつたように記憶してゐたからである。しかし、これは、私の浅学による浅い解釈であつて、川柳革新の祖の一人と言われている阪井久良伎と正岡子規に若干の關係のあつた事は、昭和三十一年四月と十月の「川柳雜誌」にのせられた、前田雀郎氏の「久良伎先生伝補遺」によつても明かであるが、久良伎の短歌や俳句や狂句や、好敵手剣花坊などを攻撃する文章に見られる、えげつない迫力は、子規の「歌よみに与ふる書」の影響を受けたのではないかと想像せられる。

明治三十七年十一月金色社から発行された「川柳久良岐点」は、川柳史上では大切な著書の一つであるが、その内容はとくに足りない愚劣な文章と狂句程度の川柳作品をまとめたものであつて、今日の川柳観をもつてすれば「川柳革新の書」などと言われたものではない。その四十一頁に

「ぢやに因つて諸君は川柳は滑稽俳句の人事面に活躍するもの、穿ちオカシ味軽味の三大要素を頭にいつも忘れてはならぬ」

とあるが、この程度の文体と、この程度の

見識によって、全文を想像されても、ま
ちがいはあるまい。ただ全文いたるところ
に、正岡子規の名が出て来る事には興味が
ある。曰く

七〇頁「吾が俳兄とも仰ぐ故正岡子規先
生は俳句に此客観の趣味を奨励せられへ
ボ主観の拙悪に陥るの非を挙げられた」
九二頁「其上に正岡子規兄が、アレ程筆
の禿る迄云はれた、文芸非文芸の区別、
客観主観のこと」

九七頁「私が嘗て正岡先生から承ったこ
とを」

一七二頁「子規子の『子子の蚊になる頃
や文学士』の句の難有味を感ずること深
し」

一九〇頁「正岡子規子が」

等々である。そして、川柳久良伎点自讃の
句として「かう言ふも皆子規先生のおん仕
込」が川柳として発表されている。これに
よってみれば、正岡子規は阪井久良伎を通
じて、川柳革新運動に大きな影響を与え
た、と云うことになる。

それから、昭和三十年六月の「現代日本
文学全集月報三二」の、子規庵縁側の子
規、と題する写真は、阪井久良伎撮影とな
っている。このように、子規と久良伎はよ
ほど関係が深かったように思われるが、有
名な「仰臥漫録」の中にも「病牀六尺」の
中にも久良伎の名が少しも出て来ないのは
不思議である。もうその頃即ち明治三十五
年頃には関係がうすくなっていたのであろ
うか。

子規がどの程度、江戸文化に興味を抱い
ていたのかわからないが、「病牀六尺」の

二十二、に文鳳と広重を比較した感想がの
っている。その一節に「其後広重が浮世絵
派から出て前にもいふたやうに景色画を画
いたといふのは感ずべき至りで文鳳と併せ
て景色画の二大家と言つてよからう。ただ
其筆つきに至つては、広重には俗な処があ
つて文鳳の雅致が多いのには比べものにな
らん」と書いているが、私の見解によれ
ば、俗なところこそ広重の風景画の味であ
つて、広重その人が雅致のない画家でなかつたことは、浮世絵風ではない肉筆によつて証明が出来る。子規が激賞して居る川村文鳳の絵はよく見た事がないので私にはよくわからない。

三十一にはこんな話のついている。「高
等女学校の教科書に石川雅望の書きたる文
を載せたるに、其文は兩國の四ツ目屋とい
ふいかかはしき店の記事にてありしため俄
かに世間の物議を起し」と言うのである。
今なら、教科書に週刊誌のエロ記事をのせ
たような事件であるから、これは大問題と
なったにちがいが無い。これに対し子規
は、当時の国文学や和学者に徳川文学の知
識のない事を痛烈に攻撃している。この一
文によつて子規が、四ツ目屋を知っていた
事はたしかであるが、そこまで知っていた
のなら、古川柳も知っていたであろうと
想像されるのに、そんな記事は見当らな
い。

私は「仰臥漫録」の中から次の様な、川
柳じみた句を見つけた。(用字原句のまま)

棚ノ糸瓜思フ処ヘブラ下ル

枝豆ヤ三寸飛ンデ口ニ入ル

栗飯ヤ病人ナガラ大食ヒ

カブリツク熟柿ヤ髻ヲ汚シケリ
ラムネ屋も此頃出来て別荘地

大漁

十ヶ村鱈くはぬは寺ばかり

何を川柳と言ひ、何を俳句を呼ぶか、その
定義は知らない。川柳人である私は、人間を
主体とする十七字調の句を川柳と名付け、
自然を主体する十七字調の句を俳句と見て
いる。だからどなたの作であつても、人間
に主体性のあるものは、川柳として觀賞し
ているのである。事実、ラムネ屋の句や、
鱈の句を、選者へ提出した場合、多くの選
者は、おそらく川柳としてこれを取扱うの
ではあるまいか。

子規の結核は悪性であり、しかも重態が
つづいたらしい。「病牀六尺」の中の、十
六・三十九・四十二・六十五・一二三・一
二四にその病苦を訴えているが、これは新
聞に発表する文章であるから、いささかひ
かえめである。「仰臥漫録」は公開するつ
もりの日誌ではないから、いたるところ
に、疼痛苦悩をかこち、悲嘆、号泣、読む
にたえないところが多い。咽喉の嚙ばかり
ではなく、背中の疵口からは膿が出て、し
かも時々発作的な痛みがおこるのであるか
らたまつたものではあるまい。しかし、不
思議なことには、それほどの苦しみが、俳
句作品には現われていないのである。臥病
十年と題して

首あげて折々見るや庭の萩

程度の句を見るのみである。若しこれが俳
句であり俳人の態度であるとしたら、俳句
はおどろくべき、嘘つき文芸、と言わねば
ならぬ。人間としての苦痛を何故、句の上

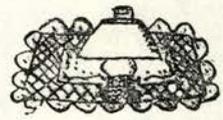
に現わしてはいけないのか。客観写生の俳
句とは、人生記録に横をむいているのであ
るか。それほど苦しければ何故俳句でも苦
しいと言わないのか。当時、子規は俳句の
教祖的存在であつたから、句の上で乱れを
見せる事は出来なかつたのかもしれない
が、文章ではあれほど悲痛な叫びを發して
いるのに、かんじんの俳句にそれが無いの
は、世にも不自由な文芸と言わねばなら
ぬ。

一昨年の夏、私は盲腸が破れて腹膜炎と
なり、三時間の切開手術を受けた。手術の
途中で麻酔のきめた時も苦しかつたが、手
術後、絶対安静絶食のみならず、一滴の水
も禁じられ、私としては言語に絶する苦し
みであつた。私はそれを句に托した。看病の
義妹に手記してもらつた。それは、川柳を
作るものの、よろこび、であつた。しかし
これは私のみではない。各地の療養患者か
らの投句には、珍らしくない事である。舌
説と言ふのは、盲目でしかも手先不自由な
人が、舌で点字を読むのである。余命いく
ばくもないと思われるその人ですら、川柳
によつてその余生を記録している。俳句で
はそれが出来ないのであろうか。

芭蕉は死に臨んで、その寂寥たる心境を
「かけまはる」と詠んだ。子規は

疲一斗糸瓜の水も間に合はず

とのこした。「かけまはる」「間に合は
ず」は、俳人としての声ではなく人間とし
ての叫びであつた。はだかの人間の木音で
あつた。この俳句らしからぬ用語によつ
て、それを感じるのには、私のまちがいであ
らうか。



猛台風災難記

東野 大八

「十五号台風は、次第に速度を早め時速三十二キロで北北東に向っています。中心の気圧は九二九ミリバール、中心付近の最大風速は六十五メートル、中心から東側の半径五百キロと西側四百キロ以内は風速二十五メートル以上の暴風雨となっており、この台風は日本の上陸してもスツポリ本土を押しつつむという超大型の猛台風ということです」

九月二十六日朝のラジオ放送であつた。

「これはいかん」

私は朝飯ものどに通らぬ思いで舌打すると早速針金とベンチを持出した。私の家は木曾川の流れに向つた二階建の建築して五十年という古い家だ。東南に面した陽当りのいい縁側から、ライン下りの歌声がつつぬけになる風景だが、その対岸から雲はるかなるところが名古屋だ。それまで山らしい山はない。その風景の視野の左手をさえぎるのは、ポロポロの黄色い壁をばげ落した二階建の土蔵。これも既に老齢で、としよりの日には最上席に招かれそうなしらものである。この家に住んで約十年、その間三、四度台風のおふり

を食って震え上つたが、以来冬の夜風の木枯しが雨戸を打ってさえ飛び上つてまじりともできないほどの風ノイローゼに私はとりつかれていた。だから、室戸、枕崎両台風をしのぐ超大型の台風襲来ときいては、足も運べぬ程のショックである。

「大型だ、超々大型だ、直径千キロだつてナ、こん畜生、こん畜生！」

そう口走りながら私はチカチカする針金の先っぽを神経質にクイクイ折りまげては、そこらあたりへからみつけた。異常なその緊張ぶりが面白いのか、そんな私をみかけた近所のおっさんが

「エライ手早いマわし(準備)ですな」

と冷やかした。今にみとれ、どえらいことになるぞ、このくそおやじ！ 私はそれに返事もしないではしごを踏みかえては針金をたぐりつづけた。

夕刻七時、タクシーが家の前についた。中から出て来たのは網代笠片手にズタ袋の僧侶と、青い背広姿の若い男だ。

「ああ、和尚さん」
電池の切れた懐中電燈の補給に

出かけようとした私は思わずそう叫んだ。四国の私の古い知己で私とも肉縁に近い御仁である。そばの男も、幼なじみのU君である。かねがね訪ねるといったのが凶らずも台風正に襲来その寸前に実現したわけである。それは心丈夫！居合せた家内もそう思ったことだろう。客としての条件は満点である。何はともあれと上つてもらつて早速めしだが、その前に先ずは友あり遠方よりの口で酒。程よく回つて身体のはてりがつく

と、妙に台風とやらしい化物がわれわれの身辺から遠のいて、笑いで九州へでも行くような気がしてきた。

ワイワイやつてる内に、小雨そほふる陰気な風が、急にぞわぞわと表の八つ手の葉をかき上げはじめた。時に午後七時。

「台風十五号は潮岬に上陸、今夜半東海道を縦断……」

とラジオだ。私の酔は一瞬にさめた。

「来るか台風……」

空っぽの袖を虚しくふって、私は柳生道場の丹下左膳もかくやとばかりスックと起ち上つた。それから一刻後、フツと電気が消えた。みるまにゴーストという地底に届く暗夜の響音！かくして東海地区の惨劇は幕を切つておとしたのである。

子供二人と妻と四人でそれから後私は土蔵へ避難して坐つていた。分厚い土室の巨大天井の梁が揺れ、土ほこりが床のそこそここた。外は瓦れきの飛ぶ音が凄じい風のうなりとまじつて漆黒の暗闇にありにあり狂い、地なりの様な風

圧が土蔵の壁の八方から押し潰しそうにのしかかる。子供は声もたえずにひたと抱き合い、妻はその上に押し重なつて石のように動かない。暗い空間に眼をすえ私は天地盲動の騒乱の極致には最早、神は存在しないものだと感じた。それはかつての日の戦場にも通じた。左手を砲火に奪いとられたあの瞬間の真紅と蒼白のプリズムの一閃が、まるで数刻前の現実を再現したかの様に眼前にひらめいた。死を意識するところに死はないというのが私の持論である。死期を悟るということは、幸福の最中に幸福のそれ自体に思ひおよばないことに似ている。キナ臭いむしろ金気(かなげ)の強い自臭を感じたとき、人間は無態な最後の死の瞬間を迎えるのである。神仏の加護を祈り経文を口中で誦じるときは、生へのユトリがたつぷりそこにある。

その地獄の瞬間が去つた直後、私の家で水浸しの着物を扱う坊さんにその感想を短い言葉できいてみた。しかし、彼は無然とした顔で何やら絶句したあと笑おうと焦つてはいたが、いつものまどかな顔に到底なれるどころではなかつたのである。

潜水艦が数百発の爆雷を見舞われ、九死に一生を得て海上に浮かび上つたようなわが家だった。それが大風一過のウソのようになさわやかな陽光の中だけに一きわその姿は悲惨かつ醜態にみえた。屋根瓦はとび壁は抜け、長い裏扉はおがらの如く散し見る影も無い。二階から緑の下まです黒い煤と赤い壁土の水滴で一片の乾くところもない。しかし、気脱けた様

な男どもは、私を入れてはじめてその明るい陽の中でゆっくりと吐息し合つたことだった。死地を脱した虚脱の中の安堵こそが、はじめて神仏に最も近いところにいる、私はそんな気がした。陽はまぶしく空は紺べき、生ける喜びの祭典は、ちとおこがまし

この台風は深そだましの名古屋で、三万五千二百七十四戸の家が潰れ、九万一千五百四十四戸の家がこわれ、三千六百四十三戸が流失、四十一万七千七百六十二戸が濁水に沈み、三千六百八十八人が死に、千六百十四人が行方不明となり、八万人の人間が水中に孤立して救援を待っているという。その日本初まつて以来の大惨禍を知つた私は、縁側の空つづきに眺めて私は人間の生き方、死に方の他愛なきにあきれ、おそれただけもなく口をあけてつたままだった。

「名古屋にくらべば天国ですよ」昨日の朝、私の台風準備をわらつた男はそういつて腕をくんで傍らに立つていた。チロリとしたこんな人間こそが、自分だけが世の中に生きることができる唯一の人間だと信じぬいている人間なのだろう。濁水とうとうたる木曾川の淵に曼珠沙華が血のように赤い。この根を洗う木曾川の濁水はそのま悲惨な名古屋の被災地区につづいてるのだ。巨大な伊勢湾台風は、潮岬から愛知、三重両県を経て、真つすぐに岐阜西部を縦断、富山湾へぬけたに私の家がつまみその風圧のコースに私の家が建つていたというわけである。



紫式部 (下)

富士野鞍馬

また「源氏物語」五十四卷の各々の題名が川柳に詠まれているので、それを拾ってみると次のような句がある。

須磨、明石

明石も須磨も外ならず式部入
(タル 四一)

石山で須磨や明石の物あんじ
(〃 二八)

帯木

帯木が有て塵なき物語
(タル 五四)

空蟬

空蟬を見んと源氏の巻を出し
(タル 七四)

夕顔

夕顔の巻は暮六ツまへに出来
(タル 四七)

庭の四阿夕顔の巻ばしら
(〃 九八)

末摘花

むかしだけ末つむ花と毒ついで

源氏名は末摘花がうれ残り
(タル 九八)

蓬生、柏木、花散里、
みをつくし
(タル 九八)

蓬生の巻へ艾をのせて干し
(タル 三四)

柏木と蓬生妾大てがら
(〃 二七)

から猫にまでも柏木身を尽し
(〃 八一)

おもしろき花ちる里へ身をつくし
(〃 三六)

三井の人相に花ちる里をかき
(〃 四一)

若紫
筆先で若紫をそめあげる
(タル 四七)

紅葉賀
源氏車へのつたのは紅葉の賀
(タル一三〇)

花の宴

御延引花の宴など御ろんじやり
(タル 三四)

葵
葵から先ッ書そふなものがたり
(タル 五三)

がさつなはあふひの上のとねり
(〃 十二)

野分
晴嵐をながめ野分をかきかかり
(タル 四四)

後チの月見には野分の巻を書き
(〃 二六)

藤はかま野分にひだを崩される
(〃 七三)

螢
一帖ははたるに光るものがたり
(〃 四四)

宇治の螢がそれて来て巻に成
(タル 五〇)

桐壺
三味線はいやと桐壺読んで居る
(宮 二)

胡蝶
うたた寝に胡蝶の巻を夢の苦
(タル 九六)

夢さめて胡蝶の巻を書始め
(〃 一四一)

早蕨、若菜
寺だけに式部青もの二把ならべ
(タル 三六)

物がたり迄も若菜は二葉なり
(〃 五六)

春の夜の伽早蕨の巻を詠み
(〃 一三五)

雨夜品定

味ジ迄はかかぬ雨夜の品さだめ
(タル 四四)

若葉
窓長閑若葉の巻へ蝶一ツ
(タル一四一)

薄雲
紫で見る薄雲の遠筑波
(タル 百)

雲かくれ

雲かくれから光りなき物かたり
(タル 三一)

月で書いても一帖は雲隠れ
(〃 六四)

薨
四ツ前迄に薨の巻が出来
(タル 二八)

総角、乙女、手習
総角や乙女の見ゆる手習所
(タル一六二)

助六の無い総角は源氏なり
(〃 六三)

手習の巻は清書に念が入り
(〃 五六)

初音
法華経のうちに初音の巻をかき
(タル一五)

篝火
篝火は光る源氏の春と冬
(タル 五四)

篝火の巻かき立て読んでいる
(〃 一一三)

横笛、鈴虫
横笛の巻ともし火へ来たで出来

横笛に鈴虫の舞ふ神楽堂
(〃 一〇九)

寄木
名山に身は寄木の物かたり
(タル一三五)

匂ふ宮
匂ふ宮かうか神だと下女思ひ
(タル 九七)

橋姫
瀬田をながめて橋姫を書かかり
(タル 八七)

まほろし
まほろしの巻をかぶつて高軒
(タル 八五)

浮舟
浮舟の巻うたた寝の顔へ苦
(タル一四九)

御法り
どく経の側で御法りの巻を書き
(タル 七八)

椎カ木ト秋は御法りの船も見え
(〃 二六)

夢の浮橋
夜書た物語りゆへ夢でとめ
(タル 四三)

夢の浮橋書き上げて鳥カア
(〃 一四九)

浮橋は五十余帖の行留り
(〃 六六)

これらの句を見ると、その
当時の川柳家が源氏物語を讀
んでいたことがわかる。



月へ行く道

— 古川柳から詩川柳へ —

高 鷺 亞 鈍

1、古川柳の跡

去日ソ連のロケットが見事お月さまに突き刺った。源平合戦に那須与一が日の丸の扇を矢で射止めたのと似て舞台効果万点だがそのスケールはどえらい違いである。といったことを頭にチラつかしながら、今は先輩達の研究した「川柳」の出所を調べている。言う迄もなく前句附の点者柄井八右衛門の俳号で、私たちが呼ぶ古川柳は、

当時の前句附を集成・刷物にしたのが万句合であり、その万句合は初代の点者柄井川柳の創刊（宝暦七年）によるから、別名「川柳評万句合」とも言った。（麻生磯次説）その多数の川柳評万句合の中から題（前句）がなくとも一句立として判る句を選んで、明和・安永・天明に呉陵軒木綿（別号可有）が「誹風柳多留」廿四冊を出し、又桃井庵和笛が寛政・享和、に「誹風柳多留拾遺」（前名古今前句集）十冊を出した。（富士野鞍馬説）私たちが一般に柳多留諸篇をさして川柳の旧約聖書として宝典化し、古川柳とは柳多留諸篇であると教

えられたのも、実は木綿・和笛の両者が柄井川柳の前句附の集成万句合の原典から附句のみを集めた十七文字形式の一句立を確保せしめたからである。

現代川柳にも厳しい批判をもつ古句研究の大村沙華は初代選句の柳多留二十四編迄の古川柳は古雅高尚、豪放雄渾、痛烈諷刺、或は幽幻洒脱、文学的にも香気の高い純川柳に満ちている。と些か自分の言葉に酔って謳歌しているが、それは文化文政期に及んで殆ど全篇が狂句の集積と墮落した文字や数字の遊戯、縁語、仕立、文句取、或は地口、駄洒落、謎かけ、ナンセンス問答、対句集から焼き直した剽窃句に至る惨憺たる構成。と比較して大袈裟に言いすぎたように私は考える。

例えば国文学者、教育大学教授の吉田精一は「川柳の本質」と題した中で、
— 川柳の価値、本質は一言にしていえば人の挙動、心のよしあし、尊卑の人情、上下の人心の有様、其外世の中の情事をざれ句にいえるもの也」（鷹塚談）
というに尽きるであろう。事物の細微な

観察、皮肉ならみ方、さては高貴なもの卑小化、不通、無粋なものへの軽蔑、人情の洞察、それが時に爽快な滑稽を産み、時に鋭い諷刺になり、又ときにくすぐりになって笑いを伴うことが多いのが、川柳である。人生苦、社会苦をも深刻なものとして苦勞がらず、一現象としてさらりと水の流れるように看過して行く。世の中はこういふものだという諦念に立っているかにも見え、川柳風の「生悟り」という評語（永井荷風「冷笑」）も出て来るのである。

といている。これを私が簡単に要約すれば、当時若干の士分を含めた庶民の座から、為政者への抵抗。高貴に対する卑小化。エスプリなき者への蔑視（インテリのシニカル）を諷し、それら人生苦社会苦を深刻に考えず、現象として捉えて、（大村氏の幽幻洒脱）さらりと身をかわし、乙にすました生悟り（大村氏の古雅高尚をいう）のものだ。とする。換言すれば、笑いや穿ちも軽みも生半かな諦念に立って人間諷刺するものなのだ。そこに豪放雄渾の

乾坤さをもったごっついものでもなく、痛烈無比の激しい諷刺はみないのである。吉田氏は諷刺に就て……

— 川柳の価値を諷刺に置くことが、一時ある人々によって指摘された。川柳は封建社会の矛盾を痛烈にさした庶民の精神の表現であるという。しかし果してそうかは疑わしい。そういう人達が必ずしも出す「役人の子はにぎにぎをよく覚え」（橋初）は八万句の中のただ一句で、この一句によって川柳の社会諷刺を論じるのは、果して事の軽重からいってどんなものだろう。— 中略 —

たとえばスイフトの作品などを諷刺文学の一モデルとするなら、川柳の諷刺のごときはあげるに足りない。——
と川柳を諷刺オンリーに規定した現代川柳人の過誤を指摘しているが、諷刺が古川柳にあると思ひ込んで、内容としての諷刺・表現に於ける穿ちと提唱する石原青竜刀を指して言っていることは明かだ。

2、古川柳復古は後向き

明治三十年頃、阪井久良俊、井上剣花坊、岡田三面子等が川柳を初代川柳の座へ戻す可く、「狂句四年の負債を返す」合言葉のもとに、再び川柳の世界を人間探求、人生批判に求め、人間及び人間の生活を縦横に活写した。と三太郎はいつているが、果して久良俊、剣花坊が文化文政時期の狂句時代の古川柳を飛越え、柳多留諸篇に復古せしめたかどうか。よし復古せしめたとして、柳多留諸篇にみる川柳の本質を完全に把握したかどうか。私は大村氏が先にいった如

く、古雅高尚、豪放雄渾、痛烈諷刺、幽幻酒脱の一連の文学的修辭を並びたてるほど文学価値が発見出来ず、又久良伎、劍花坊の初代川柳復古運動が、「新川柳」として直ちにわれわれ現在希求する人間性の探求（人間探求）批判精神（人生批判）解放（人間と人間の生活）に結びついていいたとは考えられない。

もともと私は古川柳（狂句を除く）に風俗を記録した文学として考証的価値を認める以外何ものでもないと思じているがそれは吉田氏も

「その人生観照は深いとはいえず、総体的にいて現象的である。加えるにその特色としての「笑い」はラブレエ風の豪放さもなくば、涙を含む複雑なものでもない。小規模な生活と表裏する怪しくすぐりや、浅い皮肉や、単なる譏諷に終っている。」

といい、川柳に対する文学としての稀薄性を認めている。

以上によって知ることく、久良伎、劍花坊は、その頃も尚存在した狂句宗匠に対抗する傍ら初代川柳に復古する念願を建てていたことは完全に後向であり、近代文学の裏付いた現代川柳を規定する萌芽はどこにも発見できなかった。

万一明治中期の彼らの運動に意義を見出すものがあるなら、それまで前句付、狂句、評句、から久良伎は新風俗詩即ち新柳句（「五月鯉」明三八・五月創刊）と名称の模索をすれば、劍花坊は、寧ろ四世川柳が狂句元祖という名が欲しいばかりに狂句と唱えたのが間違っている。これはやはり川

柳にしておいて実質・形式の改良をする方が川柳中興、川柳改革の例旨に叶う。（「川柳の書」岸本木府書）とした。即ち明治末期から大正初期にかけて、「川柳」なる名称が確立されたと考えられ、その川柳は狂句と峻別されて柳多留初篇の平句源流を指向したことにあった。

しかしここで蛇足して置きたいことは、ただ単に「川柳」という名称のみ追うなら、久良伎、劍花坊が口にする以前に、古くは嘉永四年「川柳二合手酒」という川柳総本に「川柳」の名称が用いられ、明治二十五年「古今川柳一万集」又「困々珍聞」という大衆雑誌の募集文芸に「川柳」の欄があった。（岸本木府説）。ということである。

端的にいて、久良伎、劍花坊の住む明治時代の川柳復興は古川柳に対する再認識と、再発見にあり、これを文学史的には日本古典への讃美に他ならなかった。されば三太郎の言で代弁した一般柳界で唱えている、久良伎、劍花坊以後の川柳を新川柳、江戸時代の川柳は古川柳と区別する何の理由も見出せず、私は新・古に線を引かず、ただ古川柳復興期と解してよいものと考えられる。しかも現代に於てさえ、高古川柳が存在しているネオ・クラシズム一派がある。即ち「番傘」による岸本木府が提唱する「本格川柳」がそれである。

3、本格川柳の命名に就て

本格川柳に就ては当の岸本木府が昭和十八年七月刊の「国文学」解釈と鑑賞の「川柳のつくり方」の中で言っているのを

私は引用しよう。

「本格川柳」という言葉が生まれたのは、昭和七年頃、新興川柳という自由律で川柳の味を忘れた尖鋭的な詩性川柳が起った時、川柳の本質を守る一派が伝統川柳でないという叫びをあげるために、スローガン代りに用いたものであった。

自由律の新興川柳でもなければ、古川柳の旧套を墨守するものではないという烽火であった。

以上木府自身の言によると、本格川柳とは川柳の本質を守る一派が、新興川柳でも、伝統川柳でもないという叫びをスローガン代りに用いた、と何だか他人ごとのように言っているのを私は奇異に考える。というのは私自身、昨年本格川柳に就て口を挟んだことから、一寸した失敗を演じている。

既に本誌の読者なら垂鈍という人間を先刻御承知のように、もともと私は柳界に対して没義漢であり、川柳に関しては未だ素人の域を脱していない。しかし万一柳界を語り、川柳を口にするとなれば「川柳雑誌」と麻生路郎やそれを取巻く人々しか存じあげないのであるが、一昨年の新年号で、柳界の諸大家から、自分に對し柳壇に對して「今年は何を成し遂げたいか」といふテーマのアンケート解答を讀んで、私は初めて柳壇の動静を知り、そして落胆した。落胆してそのまま一人、黙って柳界の諸大家に愛想つかしをして居ればよかったのであるが、たまたまその年の五月号で「柳論は花嫁」なる、多年抱懐する私の「詩川柳」理論の一端を洩すと共に、諸大家のアンケートに言及するところとな

った。その鈍先たるや激しくその頃編集部の人から、ヒンシュクを買われたぐらいに、大家羨喰えとばかり見境なしにやつつけた。

而して昨年、東京至文堂では「国文学」七月増大号を刊行し川柳大鑑と銘打って、全国各柳社の有力、十七社代表のアンケートの掲載されたのを私は読んで少からず義憤を感じた。大体「川柳雑誌」と同じテーマに近いアンケートでその返答の立派なことは流石であったが、川柳雑誌の返答とは実に雲泥の相違で、同じ人の解答とは受取れなかったのである。

その解答が何れもスカタンであったことに変わりはないが、その真面目さに於て、真摯、率直さに於て、その自己の主張を発表する責任に於て、川柳雑誌の場合は、実にダラシがなかった。

それはさて置き、私は私の詩川柳を発表する限り、広く柳界を知らぬばならぬことを痛憤したのは、その頃からであった。二言めには詩とか文学を取上げながら、現代の詩と文学に対するズレからくる概念規定の曖昧性。未だ川柳に対する確固たる定義がなく、川柳の頭に〇〇をくっつけて、それが川柳であると、テンテンバラバラに云い張っている事実から私はこれではいけない。何とかこの混頓している柳界を、現代川柳である可き「詩川柳」一色に払い清める使命感にとり憑かれたとは因果なことであつた。

閑話休題、私は京都の柳誌「平安」が、さきの国文学誌十七柳社代表の内に入っていることを知り、かねて個人的に旧知の同

人へ一部寄贈方を依頼した。―その頃、川柳以外の柳誌が知りたくて、「平安」の他にも二三頼んで受贈された―早速、私は「平安」誌を発行所からでなく、旧知から、バック・ナンバーを添えて数冊受贈された。同人雑誌となると、好意的な知友の読者から誌代を要求せず、又読者も誌代は知らぬ顔の半兵衛で、雑誌をただでもらう者が多い。これはつとめて避ける可きで、同人雑誌が経営的に破綻をきたし、潰れてしまふのはこれが往往にして原因になるからだ。それ故本来なら、私が無理を云ったのだから、誌代は勿論、別に寄金してもよいくらいでいたが、当時から貧乏神と同居し、喰うだけが精一杯で付きあいなど全然できぬ立場は、現在ともなお続いているとはいへ、だから私は、その事情を訴える近況報告がてら、せめて、何故、「平安」誌を依頼したか、その意図も明かにせんものと、私信代りに執筆したのが、昨年「平安」誌九月号に掲載されたN氏に送る手紙「傍書に―「川柳雑誌」に就て―という一文であった。この一文の要旨に就ては、前半私が柳界に未知であり、「川柳雑誌」しか読まない男であると自己紹介をしがてら、近況報告。後半になって大村氏が「国文学」で、「番傘」が伝統派の覇者で、「川柳雑誌」がそれにつづくと言ったことに對する私の反論であった。否私の反論は今春号の拙稿「漢菜論とベニシリン医薬論」の荻刺士の論文みたいなトピックで本誌の読者は御存知のことと思うが、寧ろ「川柳雑誌」の立場を擁護するというよりは柳界の動向に無知な私の弁明として陳謝し、記まり吾ながらいじらしい文章のN氏

への手紙だったが、その一個所に不覚にも私は書きたらぬところがあった。それは、―最近「番傘」は伝統川柳という旗印を本格川柳と命名したのは何故でしょう―と言ってしまったところである。私はこれに初めの方へ少し言葉を足して、

「最近、私が知ったのでは、「番傘」は云云」と訂正すればよかつたと今にして思うのだ。原文の解釈だと、「番傘」が本格川柳と命名したのは最近のことだ。となり、訂正文だと、「番傘」が本格川柳と命名していたことを、最近になって私が知った。となる。

こんなことは本当はどちらでも可いことだ。「番傘」が本格川柳を、昔命名しても、最近命名しても、私たちが真に願う現代川柳を推進せしめてゆく上に於て、雑音を入れることになつても、決して益する何物もないからだ。

従いまして、私が前から知つて居ろうと、最近になって知つたとしても、私の詩川柳に何の狂いも生じる筈はないが、その命名の時期は兎も角、本格川柳なる言葉の概念に就ては、後に述べる私の詩川柳に對する概念規定の対照になることであれば一応の究明こそ必要であらうと考える。

4、傳統か保守か

さて本格川柳に關して、大村沙華の見解では

―伝統川柳（番傘系では昭一九、木府の発意で本格川柳と自称）の作風は初期江戸川柳の伝統に則り、時代風俗の吟詠、世情の機微、市井の生計、巷の雑戯、骨

肉の愛情から、之は古川柳には皆無の作家個人生活のメモにまで及ぶ……

とあり、伝統川柳即本格川柳でありとみなしたことは私の言に代えれば、久良伎、劍花坊の明治時代と少しも変らない新古典主義（ネオ・クラシズム）である。換言すれば新・古川柳（新しい古川柳の意）と解される。

然し当の岸本木府が、3項の冒頭に引用して置いた如く、当時（昭和七年）勃発した新興川柳（自由律川柳）に對抗する保守川柳の一派が掲げたスローガンとして本格川柳があり、本格川柳は伝統川柳ではないと断言している点を、どうとつていいのだろうか。

これは明かに大村氏の独断と解してよく、木府本人の言をそのままに、新興川柳でも伝統川柳でもない、本格川柳だとみただ通り一応肯定して差し支えないと私は考える。但し本格川柳は伝統川柳ではないが保守派である。保守派は進歩派があつて、保守派が存在する。本格川柳も新興川柳が提唱されて初めて現状維持の保守陣営を究合したのであつた。ここでハキ違えてならないことは、保守必ずしも伝統と同義語に解す可きではないということだ。何故なら、こと川柳を論ずる限りは大村式分類による革新派も、人民派も、詩性派も、中間派も約二五十年の伝統をおしなべて背負っているからである。如何に超前衛を誇るアパンギャルドにも、その芸術作品はフランスはフランスの、アメリカはアメリカの伝統を持つが故の運動であり、若し伝統を無視する如く思われるものありとするなら、その手法・（メチエ）が、自然発生的

なものを破る主知主義からきている。しかし現代詩論家のエリオットの詩論が、カンリツ的伝統をもち、ヴァレリーの詩論が又フランスの伝統を背負っている如く、邦国によつてのみ発生した民族乃至は庶民の川柳を、川柳のままにして伝統を破る可能がどこにあるだろうか。

伝統に保守も進歩もなければ、伝統は保守にも進歩にも尾を引いている。私は一面に大村氏の断定する如き、古川柳の概念をもっている意味の伝統川柳を「番傘」に見ぬものではないが、私は本格川柳を提唱した当時の進歩派、自由律川柳の発生理由を検討したいし、それを知る客観的状況を捉えるために、当時の保守派としての立場をとる本格川柳の存在理由もたしかめる可きだったのだ。

例えば英国でも日本でも、その政界を語ろうとすれば、進歩・保守の片一方だけでは、英国又は日本の政界の全貌は語れない。私が従来の際成川柳を公平に観察し、思惟するなら、昭和初期に對立した進歩派（自由律川柳）に並べて保守派（新・古典派）をも併せて吟味検討するのは当然である。

しかもこの對立は、終戦後の現代川柳を批判する場合にも、無視することは許されない。

5、自由律川柳への驛義

さて本格川柳に就ては暫らく措き、岸本木府のいう昭和七年頃、新興川柳という自由律で川柳の味を忘れた尖鋭的な詩性川柳とは、どんな川柳であつたか。現在私の貧しい机上には残念ながらその資料がない。

ただ、麻生路郎が、その著「川柳とは何か」の「川柳の形式」項目に

三十年も帰国せぬという中華理
髪師の気さくな物腰 (水声)
元且——暮る (半文銭)

の句を引用し、前句が自由律川柳であったり、後句は単に印象の焦点だけをポツンと表したところで、これを川柳といつても、作者一人よがりであつて決して川柳ではない。と麻生路郎が簡単に否定しているところは、その頃の新興川柳への非難とみてよい。現在、端書版で姫路から石川兼

郎、伊良子擁一などが自由律川柳を發表しているが、彼らが昭和初期の新興川柳派を集めて、四六倍版和装綴の「自由律川柳台同句集」を戦前上梓したのを何処かで私は見た。それによると、昭和三年頃の「たまむし」の山本雨迷、昭和八年頃の「手」同人の日車、半文銭、丹路、久留美などの顔振れがあり、その他「紫」「川柳ビル」等

当時の詩性派の脚社が参加している。その合同句集が手元にないので、いぢいち句風にまで検討出来ぬことを遺憾に思うが、しかし先に路郎氏の挙げた二句と大同小異のものであつたことは想像される。

然しそのころの尖鋭といひ新興といひ、詩性といひ、厳密にはそれぞれのエコールがあつたとしても従来^の五七五の十七文字形式の川柳約束を破る自由律散文形式へ一様に寄つたことは、一応古川柳的概念による川柳意識を打破した功績を認めて可いようだ。

ただここで私の言いたいことは、その頃の自由律川柳が何故に古川柳的概念を破つ

たかという理由を追求する時、当時「詩と詩論」に依る詩人達が、自由詩時代(行横形式)から詩的散文時代(行縦文章方式)に入る運動には、詩観に大きな変革があつたということ。即ち自由詩まで(萩原朔太郎をピリオッドとして)を詩(無詩学時代)、詩的散文(春山行次説)を詩行爲(詩学時代)としたことと、軌を同一にしたとは到底考えられないのである。

6. 花と花造師・乗物と

技術者

昭和初期にあつて春山行次編集のクォータリ「詩と詩論」が当時の詩壇に投げた、このボエジー運動はまるで原爆のごとく、既成詩人の大家は、殆んど爆死するか大小の被害を蒙つたものである。

「われわれは花園に立つて花をながめるのではない。われわれは花を如何に造るかということに興味がある。われわれは花を造る花造り師である。」

といったような比喩が彼らの運動のマニフェストとして次から次へと宣言された。これを昭和生れの読者に解説するお節介を許して頂けるなら、従来、詩を作るということとは花を咲かしたということ、詩(作品)は花園に咲き誇つてゐる花でしかない。花は根から水分をとり、葉から太陽熱を吸収すれば、秋の七草のように自然発生的に咲く。自然発生的といへば、鶯の啼声も自然発生的な啼き声であり、そのような自然に生れた詩作品が花や鳥の啼声を美しくとみる人間の動物的本能を蔑視する。われわれは詩作品を創るということよりも、如何にして詩作品を作るか、その方法に興

味があつて、われわれに作品の提示を求めらるなら、それは永久の実験であり、結果(詩作品)、でなく方法論(詩的行動又は詩的活動)である。例えば庭園師が、自然の風物を配するために植木、石、に人工を加へ、花造師は、季節を問わず花咲かし、小さかる可き花を大きくし、花卉の色を変える技術に彼らのエキスパートが存在する。しかも彼らは庭園が成り、花が咲いたことは完成でなくエクスペリメントである。

くだいようだが、このところが私の今回の拙稿の重要な点であるので、以上陳べた彼らの詩論を私流に今一度例をとつて説明する。

最近私達はスピード時代に入り、ある意味に於て脅威さえ覚えるが、現在人為的な乗物としてのスピード化の尖端をゆくものはZ航空旅客機であろう。私達は日常に於て、電車よりはバス、バスよりは自動車、旅行の場合は電化した汽車、汽車より飛行機と、スピードを愛する。しかしスピードを愛し、便乗はするけれども、スピードを持つ自転車一台でも、バンクすれば自転車屋で修繕するより手がない。

明治の文明開化のころ、自転車はスピードをもつた唯一の乗物であつた。邦国に於ける馬車、人力車からトラック、タクシーに変わったことは明治末期に生れた私でさえ昨日のようになっている。電車、自動車、飛行機など、それはスピードを生みだすエンジンニアの実験の所産でしかなく、科学の発展はスピードと、それに抵抗する空気を他の一切の挾雑物を排除したスピードそれ

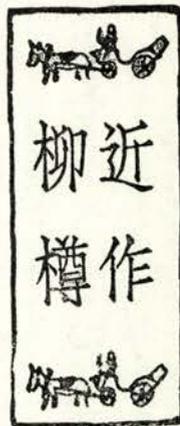
自体の研究は、遂に一瞬で地球を七廻り半廻転するものを発見した。シュツルリアリストの西脇順三郎教授はボエジーを押し進めてゆくことは窮極に於て零になると言つたが、そのように「詩と詩論」の運動は、自然発生的を破る主的技術的方法に詩人の存在価値を規定した。

今一つの理由としては、この東西を問わず、詩と韻律がアリストテレスの詩学、中期クラシズムの爛熟期に為されたボアローの詩学にみるごとく、詩(内容)と韻律(形式)が不即不離の關係に置かれていたのは、西欧の詩が移入されて邦国では明治十五年の「新体詩抄」及び「新体詩歌」第一、二集(節編)——新体詩の萌芽は早くは明治六年の福沢諭吉の「暗誦十詞」同七年「讀美歌」同九年「日本開化詩」同十年「旧約聖書詩篇」同十四年「小学唱歌集第一集」——が、日本伝統の和歌、発句にみる五・七調、七・五調、七・七調を入れたリズムを追い、事実新体詩歌のころは和歌といふよりも長歌のようなもので、それから少し遅れて明治十九年、山田美妙、尾崎紅葉、九萃などが編集した「新体詞選」は今

いう詩と短歌の合作であつた。

「汽笛一声……」の鉄道唱歌の原作者で知られている大和田建樹が出たのは、その頃で——余言はさて置き——明治二十三年から四年にかけて山田美妙が「日本韻文論」を国民之友に發表したことから、森鷗外が志がらみ草紙で「美妙斎主人が韻文論」と題して評をこころみている。(以上世界現代詩辞典、年表による)

(未完)



麻生路郎選
北川春巢選

花嫁を見に塵取りをさげてゆき 小松市 関戸宗太郎

座りだこ無い嫁が来て気が疲れ 同

女中入用貼紙が板になり 同

ひざの出たズボン養子だも目立ち 同

社説また首相攻撃して平和 同

憎まれて税務署長が栄転し 同

秋豊か故郷へ米の無心する 宇部市 上林 粗影

五年豊作八十の踊り子もいる 同

破婚は知元元の会社のタイピスト 同

引越しの忘れて行った唐辛子 同

病鶏見守って日曜フイになり 同

夫婦喧嘩 冷却期は虫の声 同

恋捨てに来れば野菊に露があり 西宮市 末沢 花美

夏やせの戻らぬままに恋も秋 同

噂ぐらいに愛をうたがうのも悲し 同

美しく生れ波紋のなかに生き 同

父の忌をつとめる母のまだ若く 父の十三回忌に 同

日焼けせず恋の採集して帰り 愛媛県 大垣たもつ

就職の関門バットで押し開き 同

一日一善無理矢理肩をもんでくれ 同

保険屋が太鼓判おす秋の出来 同

さすが看護婦憶せず生理休暇とり 同

紅バラへ夕陽が斜に花時計 岸和田市 内藤きさ子

通訳も一緒にのぞく花時計 同

こいさんの帯が涼しい花時計 同

だんじりの風へついてくし やまもと 同

青春の残り火財布の赤い紐 同

痒そうな顔が並んでいる皮膚科 宇部市 平田 実男

警棒を確かめデモへ立ちむかい 同

継母が来る日と知らず子ははし やまもと 同

物干の下着へくらしむきを見せ 同

風邪ひいた声を課長と間違われ 同

喜んだ時も母さん涙ぐみ 愛媛県 竹田 きえ

窓わくの額ぶち雲湧きトンボ飛ぶ 同

敬老会唯あの頃はあの頃は 同

体中新調と云う退院日 同

年金がとづくについで病む長さ 別府市 同

ストまで シテラス・フューア 飲んでおり 別府市 板倉天悟空

配膳のサンマ孤独の秋にさせ 同

電化し尽した挙句妻無用論 同

心まで裸になれるのも我が家 西宮市 同

夫婦喧嘩甲斐性なしと云うだけ 西宮市 山本 一傘



雑筆
春秋

山川兎の死へ

呆然の記

広江天痴人

大橋から呼べば山川兎答えそう

呆然としています。又山川兎に長命を与えなかつた何物かに怒っています。そこへ市役所の与根さんの「想出」依頼状です。監査日で忙しいのに孤呂さんが持参です。想出の記は彼らこそふさわしいのに。又、公葬の日に友人総代として弔辞した大木ふる見（市教育庁施設課長）君も適任です。又、昭和二年に川維松江支部を創設した梶谷竜人（当時奈良井仙坊。現在松江市議会事務局長）君こそふさわしいと考えるのに。監査で忙しいから家庭療養中の天痴人なら書けるだろうと押しつけたのでしよう。所が天痴人は今、山川兎を奪い去られてぶんぶんぶりぶりの最中。腹立しいのは山川兎天人や遺児哲也君ら家族の皆さんや市公営企業局の皆さんもいっしょと思えます。腹立しい。実に腹立しい。一廻りも年長である天痴人こそ山川兎君から弔辞をほしかったのに、あべこべになった。四十五才



口惜しさは三面鏡も波を立て下関市 藤田 雪峰
 望み通り瘦せて残暑がきびしすぎ 同
 汽車を待つ間をパチンコに儲け大阪 同
 庭の千草歌って妻のいい機嫌 同
 青春に悔なし遺産食いつぶし 同
 パテントを持って余生の気がつ大阪市 同
 宿直の日記は課長の椅子で書き 同
 骨董屋がほしがってから大事がり 同
 ヒヨコ買って来て正月に飲む話 同
 孫にまで里の家柄云い聞かせ空岡市 同
 退院をして別宅にもうつかり 同
 名月へ背負うて見たい母がなし 同
 平凡な庭平凡な平和あり松江市 同
 豊作は農業効いたせいにする 同
 どの角度も無事にうつらぬ三面鏡大阪市 同
 親しめぬ音でクリーナ這い廻り 同
 ビリを見る運動会に金が要り鳥取市 同
 赤トンボ豊作祝うように飛び 同
 やけくそへ笑つてくれる立飲屋山口 同
 河岸の夜に詩ネオンの下で釣 同
 ごきぶりをヒスの相手にしてた大阪市 同
 保険屋が産声聞いてた様に来る 同
 グローブを貸して相手にしても竹原市 同
 天井へ煮干を吊って余裕見せ 同
 美容師を妻にぶらぶらして遊び宮崎市 同

理想には遠い予算を妻とたて 同
 御姑の自慢が減った電気釜若松市 同
 偶然にしては揃ったお膳立 同
 ブラウスの白さが好きで恋となり大阪府 同
 勇気をお出しと別の私がかげし大阪府 同
 商魂は兄弟だとして容赦せず西宮市 同
 空気孔あけて子猫を捨てにゆき 同
 線香のよらかな女に養われ宇野市 同
 口紅の色より派手な嘘をつき 同
 阿波へ来て本場の阿呆を見て帰り大阪府 同
 のり捨てて露路の老舗の味を賞め 同
 もったいないもったいない腐りかけ相生市 同
 腹の立つ映画の帰り雨に濡れ 同
 神経痛にいいのかパチンコ屋宇部市 同
 委細面談などと速達くれただけ 同
 庭園師腫物さわるように苔大阪市 同
 熊の胆を飲んで井まだ食う気 同
 経験の話上手で貯めてい須崎市 同
 噂ほどないか新築はかどらず 同
 家も田も流されてから秋が来る貝塚市 同
 五秒前プロデューサーの手の魔力 同
 子を叱りなさいと妻に叱られる広島県 同
 掌の豆にたまの孝行笑われる 同
 テレビの輿入れ村の人だかり愛媛県 同
 八百長の如く争う若夫婦 同

を発表。今年七月に上乃木町の春朗居てABC吟社句会へ来てくれたのが初対面のようにです。その日の彼の句
 ドライブの埃り農夫はみじめだね
 折靴に黴をみつけた日曜
 日
 その頃彼は松江城に因んで松江しやちほこ句会を主宰しており七月十八日嫁ヶ島弁天祭の名残の花火を觀賞し乍ら十七名を集めて例会をやっております。彼の句、
 撒水に馬糞の蠅があわたり
 斗牛の勝って涎が尽きぬなり
 湖畔川柳会、みなかみ川柳会等へも熱心に参加活発な談笑振りで句会を賑わしました。昭和十一年の川雑支部句会吟で彼は、
 若葉光って城を胴上げすとうたっています。私の記憶は昭

車
福寿司
 心斎橋筋大丸前
 電話の三三四番



うかつにも息子の齡を妻に問 <small>滋賀県</small>	土守	蜻蛉	墓地だけの故里へボーナス使 <small>西宮市</small>	三上	美路
屏風今日貧乏かくしに狩り出され	同		音痴で唄う二次会の方たのし	同	
蠅追って追って閑中忙あり <small>松江市</small>	田中	妖人	増築もよし改築もよし子に任せ <small>河内長野市</small>	森本	黒天子
手術を前に			夏の法事も明治生れは足袋をはき	同	
切除する肺一杯に吸うてみる	同		十年目逢えばえくほも皺になり <small>岡山県</small>	杉本	たつよ
バラ作りこんなところで顔が利 <small>大阪市</small>	西本	保夫	腹たてて見ても洗濯ほっとけず	同	
山見える窓で都会の恋愛中	同		器用貧乏がフスマ貼り替える <small>大阪市</small>	加川	靖真
長唄もゴルフも出来て平社員 <small>西宮市</small>	樋口	寿栄	完全冷房神経痛へよくこたえ	同	
自動車で社長の林檎一つ買 <small>西宮市</small>	同		魚心あるのか誕生日を聞かれ <small>羽曳野市</small>	中川	利男
夏休み終って平和とり戻し <small>鳥取県</small>	同	魚崎	葬式代工面してから悲しうなり	同	
同僚の方が本場の梨を持ち	同		唇の赤さに輪がわかりかね <small>西宮市</small>	村上	球絵
豊作に腰をのばした盆踊り <small>笠岡市</small>	出原	真奇	屋上で今日も話した日記帳	同	
風呂敷を拡げ縮めるのに困り	同		煙突の煙りの割に儲からず <small>愛媛県</small>	鳥井	川鳥
パチンコで食える腕あり働かず <small>只塚市</small>	杉本	一鶴	あてにせぬ次男の儲けも聞いて <small>三</small>	同	
相談欄恥を恥ともせず明かし	同		芸術の秋だとカメラさげ歩き <small>今治市</small>	越智	一水
えらくないのが幸福に暮して居 <small>大阪市</small>	村上	和楽	黒髪を母にとかせて恋は秘め	同	
豊作に農家競うて門を建て	同		小売屋に停年もなし採手する <small>青森県</small>	木村	涼人
勝つまでの梅干だった頃の味 <small>羽曳野市</small>	水田	帆船	土堀切れたところ汚職の匂いする	同	
折角の話しやばりまた戻し	同		残業へそばかうどんかメモまわり <small>大阪市</small>	藤富	淀月
ゴマすって男の意地もないくらし <small>出雲市</small>	山本	朱紅	夏やせもよし血圧を忘れてる	同	
月給取りで老いて株など恐しく	同		公僕と云うたが痲にふれたらし <small>神戸市</small>	室田	千尋
駅の灯へ来るだんじりの派手な音 <small>大阪市</small>	竹内	花代子	胎教がどうのこうのとい <small>身</small>	同	
鶴の靴を磨いて朝を送り出 <small>同</small>	同		知恵の輪をい <small>ち</small> 阿呆が先に解 <small>き</small> <small>鈴鹿市</small>	吉田	俊和

コーヒの味

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL ☎ 6684

御集会には階上御利用下さい

和十六年九月の川雑支部句会へ一足飛びします。山川見、童人、莞路、祥月、町紅、天痴人が参加。酒断った日に花ざかり花ざかり

背泳ぎ綺麗な島の影を見る

ゲートルを逆さに巻いて

未教育

そして昭和二十年八月十五日を境目として柳友の復員があり、今年秋に出雲市で尼縁之助兄を煩して戦後初句会を催し、山川見、童人、最人、私など心はずんで加りました。

昭和二十一年一月四日天痴人居へ山川見、最人、快哉に集つてもらつて「柳城」創刊の話。三月に創刊号を出すに到りました。同君の句

いも虫みの虫僕は空腹



欠伸してたのが二次会についても

同

校門は赤旗国旗は忘れられ 大阪市 松元 利行
 お茶漬けと云って山海珍味が出 笠岡市 佐内 隆文
 残暑まだ裸のまんましゃべらせる 宇部市 神田 豊年
 妻の留守茶壺一つが見つかからず 大阪市 加川 大然
 血圧を知って苦勞が増えただけ 笠岡市 谷本鈍愚坊
 妥協する気配へお酒用意され 七尾市 松高 秀峰
 返済に来た日椅子にも深くかけ 米子市 浅野 至高
 釣竿の先ジェット機の音にゆれ 羽曳野市 高橋 尚史
 百姓はさせぬと仲人つけ加え 笠岡市 松本 忠三
 酒機嫌云うんじゃなかった理想論 大阪市 板尾 凡吉
 夏の陣過ぎて身体はかくも瘦せ 京都府 塚脇 笑太
 失恋のコケシも嫁ぐ荷に加え 和歌山県 木下 一休
 ぬりたてのマダムの唇夕涼み 石川県 高山 清勝
 年寄りがこの暑いのに腹を立て 兵庫県 斎藤たけお
 隠居部屋建てりや邪魔を愚痴言 大阪市 種谷 敏明
 復旧の話に寄れば飲む話 小松市 月田北海坊
 名門からもらった嫁で病み続け 鳥取県 谷 無閑
 住宅が建って蛍の宿がなく 布施市 坂上山椒坊
 落選が暑中見舞をまだ続け 茨木市 高木繁太郎
 婚約も決まりナイター家で聞き 和歌山県 寺柚 花車
 割勘と知らずに課長の鞆もち 羽曳野市 井阪東天紅
 ピンポンのようにいや味を 大阪市 吉川 悦子

義理合い上迎える医師へもみ手

高木 洪楯

訃報を他所にポスターの海は呼び 布施市 仲野とん智
 子の居ない親類子供がすぐに飽き 竹原市 杉原 愛鳩
 言うこともないかと名士立ちあ シブヤク市 児玉 不村
 喧嘩した仲で再会肩叩き 大阪市 木村 文福
 仏心を出しても前科拭われず 堺市 武田軍治郎
 お隣りの主人時計のよに帰り 大東市 斉藤さかえ
 グラマーももう潮どきの秋になり 兵庫県 常岡 孝風
 豚の如くにと偏食いましめる 倉敷市 小倉美音子
 へそくりもたんまり出来て妻昼寝 倉吉市 奥谷 弘朗
 初孫が出来て玩具の価に魂げ 京都市 大久保 和三部
 千円札あ釣銭になり下り 大阪市 松谷 政俊
 相棒がのれんと聞いて頼りなし 玉島市 井上 旭峯
 ヒステリーあるとは見えぬ 西宮市 山岡 半歩
 ゴルフアの悩みに腹が立つてくる 石川県 斉藤 巖
 鶏売りし銭懐に屋台の灯 下関市 宮藤 慈雨
 内職かと聞けば私の趣味ですの 岡山県 横山 一声
 妻の舞差す手忘れた首を曲げ 竹原市 松井 可笑
 正札にまだ掛引の値を残し 八代市 永松 道雄
 風の中でこそ鯉のぼり威勢よし 大阪市 中西兼治郎
 ラツシニアワーおしと やがては遅刻する 枚岡市 小林 きみ
 自由意志の出入コースも道に添い ハワイ 宮政 周防

総合ビタミン剤
強力
パンビタン
 「タケタ」

30錠・100錠
 ほかにミネラル入
 強力パンビタンM

体カニ

さるにても子供にだけは
 喰わせたし
 虫干しに出た新聞が捲つ
 ている
 次男から下は自由に育て
 られ
 自由主義結局米のことに
 なり
 英 霊
 花吹雪末は実ると信ぜし
 に
 知事ポータス返上
 あっさりと三万円のチツ
 プかな
 柳城から「松江」となり更に川雑
 松江支部の再々出発となったので
 す。島療の葦川柳会への精神的経
 済的援助は会の続く限り忘れ得ぬ
 事です。果然のまま記しました。
 (昭和34年9月17日記)



・特集・

わが獨身の句

獨身主義の「そこが知りたい」と失礼な企画をいたしました。

獨身と訣別

尾崎方正

(明治三十二年七月七日生誕六十歳)

川柳雜誌社から私の獨身の句と獨身主義の一端を知らせとの仰せ、実は十月初旬結婚する事となりましたので、獨身と訣別する前に読者諸兄には一老書生のたわ言としか聞えないと思いますが、とりとめもなく記して私の責を果すことと致しました。

私は元來獨身主義と云うような高潔な主義の下で今日まで来たものではありません。手前味噌も加わり聊かお聴きづらい点多々あるでしょうがまあ聴いて下さい。

の
春悲しいつまで続く独り身の
更けゆけど枕一つが待つ身
なる
ワンガラス水は孤独の味が
する

これ等古い私の句は、致し方なく獨身を過ぎなくてはならないと考えた私の五十歳前後の悲惨な生活を詠んだものであります。

それでは何故獨身を続けなくてはならなかったか？これはわが路郎師もある程度御承知の事と思えますが詳しくはご存じない筈です。

私が大学を出たのは満二十七歳の春、其二年前より後に教授とされた人の家に卒業前まで医師の実態を知る為無給の書生をしていたのであります。その人の妻君に二人の妹があり、次々と私に正式の仲人を介して申されるでなく、所謂ひつ附けようとされ、当時何遍も「据膳喰わぬ阿呆が無い」と暗に匂されましたが、私に何の反応もなく遂に次々と良縁に嫁いで

行かれました。所が其教授が退職される事となり其令嬢が再び私の対照として登場して来られたのであります。そして今は故人となられた当時の学長、事務長及び二、三の教授が關係せられ、時には大変おどされた事もあります。後に総長となられた其当時の教授からも「云う事を聴け、そうでないとどこからも嫁を貰えないぞ」と上の近鉄改札口で偶然逢った時に叱られた(否好意的に申されたのであります)よう、ような事もありました。併しそれ迄も又それ以後も一度として仲人を立てて正式に縁談を持って来られた事はなかったのです。これには何か理由があると考えるのが至当でありました。兄や姉が之に極力反対したのであります。私は人面やけくそになるのはこんな時だあとしみじみ体験させられたのであります。茲で断って置きますが勿論学資を出して貰ったわけもなく又二年足らずの書生々活中お小遣いを

戴いていたのではありません。また学位論文を他人より早く書かせて戴いたわけでもありません。

縁談へ日ソの如し君と我
當時を偲び後日の句であります。

私が後年学位論文を書き上げた時、或教授が洋行して来なさいと申されたのであります。これはあの縁談に關係ある話だあと考え早速「官費洋行ならばほんの三カ月でよろしいが他人の私費洋行ならば少くとも二、三年で真に私を男にして呉れるならば行って参りましょう」其頃は五千円で半年洋行出来たので僅か半年の洋行で私を一生縛りつける肚ならば参るわけにゆきませんと答えたのであります。或教授とは面白い事に其当時川柳して居られました其語のあった後「冷徹さカッタグラスに似たあいつ」と詠まれ、また私が周囲より苛められていた頃「目にものを見せんとすれど金が要り」等発表されましたが今は故人となつてしまわれました。

永く続いたこの話が片付き、自由の身となったのは四十二、三歳の後の事でありました。もう結婚適齢期も過ぎ財産もなき弟の身分では淺測とした若い嫁は来て呉れません。それで一生安月給取りに甘んじて独り暮そうと考えたのであります。当時或人から嫁を絶対貰わないと云うならば何とかして遣らうと云っていると聞かされた事

もありません。併し私は此時またそれ以後も絶対嫁を貰わないと云った事がありません。いつも十八歳の嫁を貰うんだと冗談を飛ばして居たのであります。

待つて居る人はないけど帰らうか

獨身部長別途小使伏せてあり

来客へ獨身伍切り持つて立ち

等投げ遣りの句でその日その日をやけ糞にもならず大過なく凡々と暮し続けました。

独り居れば余命幾許秋そぞろ

嫁もなく子もなく還暦しのびより

六十年一枕で虫を聴く

これ等は比較的最近の句であります。是で私が止むを得ず獨身で過したのをご理解出来ると思えます。それで一生獨身で逝こうと思つて居りました処、この世界戦争で兄は二人しかない男の子を戦場で喪い家を相続する者がなく遂に私を相続せしめる事になったのであります。そこで生後初めて本気で嫁を捜すこととなり、幸にも或人の仲介でおそまき乍ら
獨身はパンツも洗いに
と云う
に左様ならをすることとなりました。三十六歳の初婚の娘を貰つて彼女に私の今日迄の句を集めて貰

半人前の人生

山川阿茶

い単行本を出版したい事は私の大

いなる希望の一つであります。

わたしは小野の小町にて待る訳ではないのだが、

男みな阿呆に見えて売れ残り

尖端をゆく小嬢ちゃんて売れ残り

この二つの何れか知らぬ、或は両方プラスされた結果かも知れないが、売れ残ってみれば一人でおるより仕方がない。しかし負け惜しみではないが一人でおった事を決して悔いてはいない、むしろ今の時世になってみればかえってよ

かったような気がする。先見の明があったのじゃないかとさえ思う事がある。何故なら甲斐性のない亭主が荷厄介になって伸びられぬ女性、甲斐性のない亭主に気兼ねしながら共稼ぎしたり或は宿六を飼育しておる女性もある。それでも会合に行くのにも主人の顔色を見、帰りの時間を気にしている。又折角夜の目も寝ずに、おしめの世話から、やれ入学試験やれ就職、結婚と苦勞して育てあげた子に最後は邪魔者扱いされたり、心配かけられたり、子供があっても世話になれず独り住居の人、養老院行きをする人が沢山ある。

世間の人々の相当突込んだ内輪話を総合して考えると、頼れる者は最後は自分一人であると思う。戦後世間一般の人情が薄くなったように夫婦関係、親子関係も何かしら薄れて来たようにも何かしら打算的になって来たようにも思われる。殊に若い人はどこの感が強いように思われてならない。女にくせに母性愛がわからないのかとお叱りを受けるかもしれないが、土壇場になれば可愛いのは自分じゃないだろうか。

私は先天的の独り者らしく四緑の酉年は後家屋だそうで、本名の初子も十格で十と云う数は完全に意味し、外から入る余地がない。それで男性も受け入れられず弾いてしまうのだそうで、八卦でも姓名学でも四柱推命でも、全部後家即ち一人でおらねばならぬ運命だそうである。若し主人があってもマイナスになってもプラスにはならず、女であっても男のように仕事を持つて一生働かねばならぬ運命だそうである。

縁談へ見せた手相は後家の相

でこれが私の宿命らしい。

一人おって気楽とんぼでその上嬢ちゃん気分がぬけないから若く見えるらしい。按摩も肉体的にも二十年若いと云う、まッお世辞の五〇分を引いても十年は若いらしい。藤の声(精神年齢はもっと若い)誰れですか、そんな事云う人は……その代り叩きやみの喰いやみでその点心細いと思わぬでもないが、プラスにならぬ宿六ならあっても同じ事ときっぱり諦め切っている。仕事はあるし多方面に興味はあるし従って男性の友人、知人も沢山あるし、ノイローゼにもならず、男性ホルモンの注射で発作を押えねばならぬ必要もなかった。しかし争われぬもので、

男みな阿呆に見えて売れ残り

女同志男飼育のことに触れ

共学が一番二番女の子

花ちゃんに泣かされて来る

男の子

お家はんの鶴の一声皆だまり

と云うようなダイアナコンプレ

ックスめいた句が出て来る。

若い頃サンデー毎日が大きな写真

真を載せて艶っぽい話ゴミ箱に捨てられる程あと書いた事があつたが、やっぱり一人でおると世間は何かと噂したいらしい。四五人でダンスホールに出掛けても新聞のゴシップ欄にその内の有名人と二人で行っておったように書かれる

のだからたまつたものではない。事情を知つた人は「もっさりした松葉杖ついて」とオプザバーをつれて歩いてゐるのを気が毒がたり、甲斐性なしにしてくれる。生活力がなければ女は駄目だと馬鹿にされ一人でもどうにか向うをむいて歩いておればヤレバトロンがあるの、二号じゃないか等云いたい世間である。昭和二十二年迄は両親が揃つていて、二十四年に父を失つてからは文字通り一人切りで毎年税務署が同情してくる。

男には至る所に青山ありで旅の恥はかき捨てとか何とかいい方便が沢山ある。しかし女の場合(近頃は多少変つて来ているかもしれない)殊に私などブライドが高いのか、しよむむない男は嫌である、注文が沢山ある、自分の理想に近い男はウロチョロしてないし、先方がノーサンキューであろう。結局は相合わぬ男性対女性の並行線である。殊に面々があつて多少の財産でもあれば警戒心も手伝うて易々とよるめきも出来ないじゃありませんか。

女世帯猪口はお汁の味見だ

大晦日煮メもたかず小唄弾

独りものにはなり

たかない

鼻声で仲居も唄う枯れすすき

野村味平

子に縁の薄い運命を気楽が

最初に東京から嫁がきまりかけて、其の後、どちらからともなく自然消滅のような態になって、この縁組みが尻切れトンボみたいな結末をつけたのも、あれからもうかれこれ二十五年も以前のことになるかと思う。今から考えるとどんな理由があったにしろ惜しいことをしたものだと思つてゐる。

無法松のラストへ涙さそうなり

この時分、私にとつては、一度、思想を転換する方面について、感わされていた際でもあるから、寧ろ、自由で、奔放に振舞える独身を喜びとしたいのであつた。あまり丈夫ではない身体で、貧乏のありつたけを仕尽して、よくもこれに堪えていたのである。

祇園恋しあやしき格子の灯もおぼろ

こうした最中に、唯一の実母を喪つてしまひ、兄弟、姉妹もない孤獨の身軽さを、いいことのようにしてゐたのである。

一人来て独りは淋しい墓ま

そうこうしてゐるうちに、大東亜戦争が勃発して、私は、尼崎市へ移住したが、ここでも、もうそろそろ嫁を持つてはと言われるので、京都市に住む伯母の肝入りで、いよいよ見合をする事になったのであるが、その見合の当日は、諾、否の返答もせぬまままで

席を去つて行く私の姿を見て、これはつゞき氣に入つてのことだろうと、呑み込んだのは伯母さんである。

老嬢は条件つきなら嫁く氣らし

いずれば、あれもあんな風来のような男であるからして、結婚の費用も親戚一同で出し合つて、盛大にしてやろうではないかと、話をまとめたのである。ところが肝

腎の私は、断る腹でのんのんと、日を遅らしているうちに一週間ほど過ぎたのである。戦争ボケも少々はしていたのでしよう、一週間程と思つてゐたのが、半カ月も過ぎていたとのことで、すっかり呆れられてしまつたものである。その

時の断り口実はどんな風に言つたらよいかと、随分に苦心をしたもので、爆撃も激しくなつたので、今さら世帯などとは持たないことが利口だと思つたので、結局、これ一点張りで押し通したのであるが、見合の場所では、いいとかいけなとかの意志表示は、その場で即座にやるものと、叱られて始めて知つたが、いろいろ氣ま

ずい手遅い出来させたものであり、けれども自分にすれば、あまりに口喧しく言われるので、致し方がないなあと生氣分もあつたのである。

それからこの見合の相手は、間もなく他家へ縁づいたが、空襲で

爆死したのでさうで、これにつけても伯母からは、散々に愚痴られて、いささかネーを上げたものである。昨秋、上阪したときにもこのことを忘れずにいて呉れて、今も独り身でいる私をつくづく眺めて、この話を持ち出して懐か始末である。

ふるさとはいいものの独り住いでも

私には、生涯を独身主義で押し切るなどと高邁な考え方は、毛頭、五十五才になる今日までには持ち合さないので、余儀なくささせられてゐるとも言つたなら適切かとも思つたのである。

しつぽり溶け合つて、世話をやいてやろうかと仰るお女性を見かけることが出来たならいつでも結婚する意思はあるにはあるのであつた。

いよいよ終戦を迎えて、ふるさとに落ちついてからは、これも相手が世間にはあるものかと、半信、半疑で、いい気にさせられるくらいに話を持って来て頂ける。春、秋の婚礼の時期が最も多いので、その度ごとに何だかだと暇をとられて煩しいこともある。一時は、一カ月の間にどれほどは話があるのか知らんと、散えて見ることもあつたが、何と申しましようか、帯には長し、襷には短かして、今もって独身生活で明け暮れているのであるが、嘗て私自身に

は、味わつて貰えるような立派な、独身の匂らしきものが見当らないのである。

新住居島の窓もうれしがり火種をやるかとも言わぬおかみさん
やき海苔の朝がうれしい江戸の味
二階借下の女房も無愛想
カレーライスだけの昼餉もはかなけれ
こうすれば家族やないのと肩を揉み

夫を大事にする運動

不二田一三夫

宮城県志田郡松山町のある婦人会では、百何名の会員が「夫を大事にする運動」というのを昨年からはじめたのである。恐妻ノイローゼ組には別世界のような話である。

「家庭を明かしくし、仕事の能率を上げるため」だそうだから、結局は「良人飼育法」なのであろうが、いい思いつきであると思う。

①疲れて帰る夫を気持ちよく迎える。②疲れた夫をアツマして慰める。③疲れた夫をアツマして慰める。④疲れた夫をアツマして慰める。⑤疲れた夫をアツマして慰める。⑥疲れた夫をアツマして慰める。⑦疲れた夫をアツマして慰める。⑧疲れた夫をアツマして慰める。⑨疲れた夫をアツマして慰める。⑩疲れた夫をアツマして慰める。⑪疲れた夫をアツマして慰める。⑫疲れた夫をアツマして慰める。⑬疲れた夫をアツマして慰める。⑭疲れた夫をアツマして慰める。⑮疲れた夫をアツマして慰める。⑯疲れた夫をアツマして慰める。⑰疲れた夫をアツマして慰める。⑱疲れた夫をアツマして慰める。⑲疲れた夫をアツマして慰める。⑳疲れた夫をアツマして慰める。㉑疲れた夫をアツマして慰める。㉒疲れた夫をアツマして慰める。㉓疲れた夫をアツマして慰める。㉔疲れた夫をアツマして慰める。㉕疲れた夫をアツマして慰める。㉖疲れた夫をアツマして慰める。㉗疲れた夫をアツマして慰める。㉘疲れた夫をアツマして慰める。㉙疲れた夫をアツマして慰める。㉚疲れた夫をアツマして慰める。㉛疲れた夫をアツマして慰める。㉜疲れた夫をアツマして慰める。㉝疲れた夫をアツマして慰める。㉞疲れた夫をアツマして慰める。㉟疲れた夫をアツマして慰める。㊱疲れた夫をアツマして慰める。㊲疲れた夫をアツマして慰める。㊳疲れた夫をアツマして慰める。㊴疲れた夫をアツマして慰める。㊵疲れた夫をアツマして慰める。㊶疲れた夫をアツマして慰める。㊷疲れた夫をアツマして慰める。㊸疲れた夫をアツマして慰める。㊹疲れた夫をアツマして慰める。㊺疲れた夫をアツマして慰める。㊻疲れた夫をアツマして慰める。㊼疲れた夫をアツマして慰める。㊽疲れた夫をアツマして慰める。㊾疲れた夫をアツマして慰める。㊿疲れた夫をアツマして慰める。

最新らしい薬理に基いた代表的な鎮咳剤で鎮咳と祛痰且つ鎮静効果をも兼ね無毒性で迅速に奏効し効果の持続は数時間に及びます

INABATA

咳に

ファストシルス注

鎮咳 祛痰 鎮静

【包装】2cc×10A・50A
販売元 稲畑産業株式会社 大阪市東区道修町2

非麻薬・無毒性

楽しかった

ひととき



路郎・霞乃御夫妻と語る

石曾根民郎

戦争が激しくなった頃、麻生路郎氏が、雑誌奉還の決意をもちたらしに昭和十八年の秋松本に來られたことがあった。私は浅間温泉に案内したが、いろいろとお話を承り、相変らず情熱と意気の持ち主であることを知らされた。その前、昭和十一年の秋にも松本に來てくれたが、その時やっぱり浅間温泉に泊っていた。私も同宿した。

朝空に雨は無帽の師を迎へ
ねざめては湯の香の窓へ
師をさそひ

私はこのように詠った。相憎、雨催いで路郎氏としては、希望でもあった日本アルプスが見られなかったことが残念であったろう。

雨の松本にて
遠く来て信濃に山のない
日なり

これは路郎氏の率直なる詩情であったのである。

私が川柳に手を染めた動機は

「川柳雑誌」から昭和四年の頃であった。雅号らしいものをいろいろ詮索した結果・（らっぱ）を名乗った。しかし自分ながら卑下したような、おかしなコンプレックスを感じてまもなく本名の民郎として今日に至っている。

そうした私の揺籃期にきびしい精進をつづけさせた「川柳雑誌」であったし、その後、川柳不朽洞会員に推薦して貰い、川柳界というものに対する視野をひろめさせてくれたのである。とにもかくにも「川柳雑誌」は私にとって川柳の故郷であることに相違ない。

殆ど不毛の土地である自分の住む松本に何とか川柳を植え付けようとして努力した。それが「川柳しなの」の発刊に結びつき、昭和十二年一月号を創刊号として、その間、戦争中廃刊を強要されたが戦後また復刊し、この十月号で二〇六号に到達した。

今日に至るまで陰に陽に麻生路郎氏からは格別なる鞭撻と指導を

していただいた。ここ数年さっぱり「川柳雑誌」に句も文も寄せない自分を恥ずかしく思い、またそれを叱らずに見のがして下さる師の恩情にただ縋るばかりである。

昭和十八年の秋以來何とかお逢いしたいものだといつも考えていた。雑誌で拝見するとうもおからだの具合いがわるいように伺ったのでお見舞をせねばならぬと思つていた矢先、昭和三十三年一月十四日に路郎氏を訪ねた。思つたより路郎氏はお元気で安心した。

路郎氏宅で川上三太郎氏にお逢い出来た。その一月十四日には霞乃奥さんが朗らかな応待で、酔余、レコードに合せ、何かと教番踊りを見せていただいた。そのとき、霞乃さんはどこへ行くところではないうちが、ぜひ信州を訪ねたい。「秋がエエかいな、路郎と一しよや」と言われた。そして今度その旅行が実現されたのであった。

長野県山ノ内町湯田中におられる中島紫痴郎さんは路郎さんと若き日の柳友であり、何とか久しぶりでお逢いしたいというのが年来の願ひであったであろう。信州に來るのにもなかなか慎重で、大阪から一気には山ノ内町に行くのではなく、木曾で一泊するという予定

を組まれた。九月三日夕方木曾福島駅に着かれた。湯田中に廻り、数日滞在し、それから帰途松本に來られるということであったので、いずれ連絡があることと思つていた。あたかも九月六日全国鉄川柳人連盟第三回大会が長野市にあり（長野市と湯田中は電車で約一時間）私は定應選者を頼まれていたので出掛けした。尤もその前日、印刷機材見学を兼ねた秋季懇親会が私の関係する印刷組合で湯温泉（湯田中に近い温泉）で開かれたので、夜、中島紫痴郎氏に電話をかけ、いま湯温泉に居るが、どうせ路郎氏とは松本で逢えるので行かないが、お

酒
清

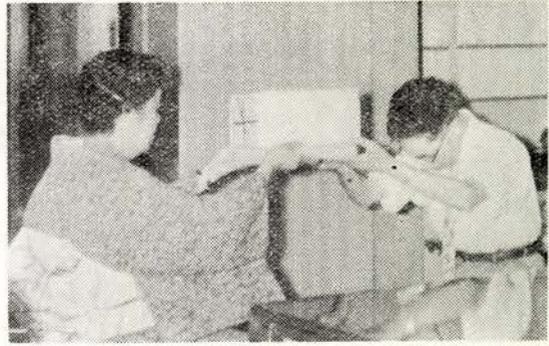
灘・魚崎
大塚合名会社釀

迷惑をかけることを考えて遠慮した。もともと、中島紫痴郎氏とは毎年五月に開かれる長野県川柳大会（今年で十三回になる。毎年会場を交替制で話し合いによってきめる。）でお逢いしているし、紫痴郎氏はわが長野県に於ける大先輩で、七十八歳であるが益々健康、若い者には負けぬ発刺たる川柳人である。目と鼻の先にいるんだのに或いは失礼かと思つたが、路郎さん、霞乃奥さん、紫痴郎氏の三人を秋の静かな夜、そっとさせたく思つてわざと行かなかつた。

六日の全国鉄川柳人連盟第三回大会席上、「川柳雑誌」に關係ある吉原紅月さん、水尾永新さんが刺を通じて逢いに來てくれた。お互い「川柳雑誌」にはぐくまれた人たちのようだが合つた。この大会は国鉄らしい雰囲気であつた。このとき呼名も門鉄の誰々、大鉄の誰々というのであつた。盛会で何よりであつた。

九月八日午後三時半頃、電話があり「いま松本駅にいるから」と路郎氏の声であつた。早速、駅待合室にゆくといくつも旅行鞆をかかえた路郎氏と霞乃奥さんがおられた。ハイヤーで一踏浅間温泉へ走つた。嘗て來られた松本への回想を路郎氏は車中で語られた。

梅の湯という温泉宿へ案内した。あふれるような湯の香に路郎氏と入浴した。熱い湯に入らないようにしておられるとお話であつた。



藤乃先生から潮花氏に記念品が贈られる

川雑婦人友の會

五周年記念祝賀會

——ここにも実る豊作五年

(会場・中島邸)

集局から記者。あとは全部女ばかりの異色集団である。

酒田清子さんの司会、藤村梨花さんの開会の辞から、山川阿茶理事長が挨拶をされる。

五年前、先生のお宅で第一回の会を開いたときは十数人だったが、今や百名を越す大世帯になり、遠くハワイの新聞にまで紹介されたことをよろこび、これまでに育て上げた潮花氏の労を謝し、こんごはこれより盛大にして、潮花氏にもよろこんでいただけるよう皆さんと共に進んで行きたいと阿茶さんの頬が紅潮する。

ここで段乃先生から、潮花氏に感謝の記念品が贈られたのである。

来賓の土井文蝶氏は、よそで見られない婦人ばかりの会を誇れと祝詞をおくられた。中島生々庵氏また男性、女性に優劣はなく、男性が真似のできない女性独自の句を吐けと激励される。

麻生段乃会長は、「私は闘争はきらいだが、金混集は男性に負けないでほしい。

桜なら櫻刑務所いまま景頂 (好節) この句の「なら」に批判と表現の巧みさがある」

と、作句の親ごろをじゅんじゅんと説かれ、愛のムチが発止とひびく。

兼・席題もおわり、ビールとジュースで友の会の発展を祈る乾杯もなごやかに七時めたく散会することになった。

美しい友情で結ばれた婦人友の会万歳の声が宏大な会場にどよめく……。

写真・村山光輪・ベン・不二田一三夫

五周年記念句会に寄せて

藤村梨花

残暑きびしい日が続いても、さすが秋めいた風の味わいも一しおの今日、川雑婦人友の会五周年の記念句会が例年の様に中島先生御夫妻の御好意により一と時の集いを諏訪の森で持たせて頂きました。いつもながらの楽しい集いにも今年ばかりは一沫の淋しさを漂よわせている様でした。発会の時以来何かと細やかに且つ計画的に着々と会の進展をはかっていただいた潮花さんがこの度友の会を退かれています事について、さやかな謝恩会が兼ねられていたのです。いつも親切に、何のわけへだてもなく御世話して頂いただけに、今更すき園風の吹き

浴後、二人はペランダの椅子に腰をかけ西の方の日本アルプスを眺められていた。ようやく薄暮、曇り日の今日はあまり雄大な山なみを見ることが出来なかった。しかし僅かに雲が払われた一瞬、近い山裾があらわれてくれた。灯が点いた。「川柳雑誌」のこ

おひげそりには
安全で
経済的な……

打標印 フェザー剃刀

と、今日の川柳のこと、信州の印象、信州の酒のこと、こもこもお二人の声を聞いた。微酔のうち本来の情熱をよみがえらしたようであった。熱が入り流瀉として語らいがつづいた。

浅間温泉で一泊の予定を変更されたので、夜行列車まで私の家に寄られることをすすめ、そこでハイヤーで大名町の私の家におちつ

入る様な味けなきが誰の胸にも五年間の思い出と共に去来していた事でしょう。

定刻一時より清子さんの司会により始められた句会、庵主中島先生の女性らしくさせて頂いての御造詣深い御研究の話をきかせて頂き、「女である事」「女を女が造る事」のむすかしさを感じました。会長霞乃先生からはいつもながらに御親切な良菜の衣服、川柳の批判性についてをうかがいました。私達のささやかな記念品を心よく潮花さんに受けて頂いた事はこの上もなくよろこばしい事でした。

兼題、席題共に女性ならではのの仲々の力作殊に潮花さんの御寄贈による「潮花賞」次々と積まれて行く様はまことにほほえましいものでした。

無事句会も閉会の辞と共に終了し、宴席がつくれ乾杯、ほっとした顔、なごやかな話題、柳趣つぎる所なき本日の集いも秋の陽さしのかたむく頃次回を期して解散しました。

ほんとうに藁の上から育てて頂いた潮花さん、お名残はつきないけれど、成長脱皮の一過程として私達もお見送り致しました。

この次の句会からはお客様として、且ての育ての親として何かと困った時の相談にも、乗って頂ける様又、楽しい集いには心よく来て頂ける様、私達は潮花さんの健康を心からお祈りしたいと思います。

兼題「風」 麻生霞乃選

(三才及び輪時)

野心作嵐へ巨費が投ぜられ きさ子
犬小屋の向きかえてみる嵐の日 阿茶
回れ右してまで嵐来る日本 若菜
台風の進路気になる旅の留守

兼題「海」 丸尾潮花選

夏手袋おとしたままの秋の海 きさ子
意地捨てよ捨てよと波の打ち返し 梨花



写真説明

前列左から・小石・潮花・霞乃先生・阿茶・文雄・生々庵・香林・哲夫ちやん
中列左から・一三夫・清子・富士子・悦子・きさ子・知恵・徳子・梨花
後列左から・春菜・奈良子・あやめ・つゆ・花代子・梨花・藤子・若菜の諸氏

船室は海を見あいた無駄話 梨里
夜光虫故郷に近い波の色 高橋操子選

兼題「手まり」 高橋操子選

手まり唄母は乙女の声になり あやめ
物干へ来てお竹どん手まり唄 都詩子
うるさい家の扉を手まりは越えてき 良子
てんき手まりよしの村は夕焼ける 中島小石選

兼題「化粧」 中島小石選

ライバルがあつて化粧へ念が入り 花代子
思いきって今日は素顔で逢ふ気な 良子
葉屋裏だんだん女に出来上り きさ子
手術した子へ幾日か化粧せず

兼題「女同士」 小西富士子選

女同士きつちり勘定して別れ 清子
女同士男飼育の事に触れ 阿茶
女同士になつて遠慮のない話 梨花
兼題「記念」 武部若菜選

記念写真豆つぶ程の顔ならば 小石
記念品贈呈と云うとこを撮り 良子
月世界へもう記念碑が届けられ きさ子

★

記念写真ひとり笑わぬあまのじやく 奈良子
その日から化粧忘れた束ね髪 春菜
李ライン海の男にある度胸 陽子
小さい手と一緒にパパを砂にうめ 明枝
日傘くるくる波打際の恋たのし 友子
自殺する覚悟の海が恐ろしい 周甫
折角の記念写真に目をつむり 悦子
海鳴りへ熱の児しかと抱きしめる 美音子
ストライキ女同士はうまが合 徳子
女同士ケースの裏で何か食べ 俊江
祖母さんの御機嫌手まり唄が出る 江
嵐などいとうておれぬ義理があり たつよ
手まりもう野球のまねを兎がし出し 宏子
出席者一霞乃・小石・阿茶・花代子・梨
花・知恵・清子・悦子・春菜・奈良子・一
栄・徳子・あやめ・梨里・操子・きさ子・つ
ゆ・富士子・花奈女・宏子
来賓一中島生々庵・土井文蝶・丸尾潮花・
武部香林・村山光輪・不二田一三夫

いた。私より話上手な妻や娘をか
こんで今度は家庭的な空気にひた
っていった。

私に「大阪に来給え。君には大
阪で文楽を観せよう。そうして沢
田四郎作博士(民俗研究、私とは
久しきの知り合い)に逢わせよ
う」と言った。また、「紫痴郎氏
と長寿くらべて信州には来年もま
た来たい」と笑いながら話され
た。

郷土づくりの奈良漬をつまんで
いただいた。腹いっぱい食べて食
ことをひかえ、話が多かった。

録山館に行かれないのが残念で
あったようだ。萩原録山の遺作を
常時展覧している、南安初穂高町
は松本から電車に乗って四十分だ
が、路郎氏が萩原録山を知ってい
ることは私にとつて驚異であつ
た。さすが知識にひろい路郎氏だ
と思つた。(萩原録山は彫刻家、
二十三歳で渡欧、ロダンを屢々訪
れたのでロダンの影響を受けた作
風を示し、わが国彫刻界に一エボ
ックをもたらした。明治四十三年
三十二歳で夭折した。)

別れる時間が迫り、心惜しいが
お二人をハイヤーで送ることにな
つた。夜気は信州らしく澄みに澄
んでいた。信州は空気がいいなあ
とお二人でつぶやいた。ハイヤー
の窓から後ろを振り返りながらさ
よならをされた。お健在であれと
私は口のなかでつぶやいた。

蔵(俳号白猿)が三人の紹介者を通じて、仙匡にやっとな面接をゆるされて、聖福寺に出かけた、二時間以上玄圃の次の間に待たせられても、仙匡なかなか顔を見せない、仲介人が再三和尚をうながしたがやっとな炉辺をたち上った仙匡は「では逢ってやろう」と、つかつかと襖をとんと開けて、団十郎の海老蔵を睨むが如く見るかと思うと

「大きな眼玉だ」
仙匡は言ったかと思うと、悠々と部屋を出て行った。

仲介人は気の毒でならぬから、団十郎に「すみません、すみません」というと、団十郎は、「いや、結構です、私の一番自他ともゆるされている眼玉を称めて頂いたのだから以上の喜びはありません」

と、喜々として立却った有名な話が残されている。

最近物故した博多出身の彫刻家、山崎朝雲師が大正年間、末、市川宗家を訪問してからその事実を調査したら、同家に左の半切が残されていたと言う話を私は聞かされた。

お江戸ではいちかわ二かわ知らねども
博多で跳ねた海老の眼玉

仙匡は狂歌もうまかったが、狂句などは博多方言をまじえて、その名作が今日迄も、土地の同好者に親まれはは笑まれている。

七代目団十郎への狂歌は後日

尚が江戸へ送り届けられた話であった。

翌年正月、長崎興行からの戻り七代目は又博多に立寄ったが、その後の仙匡和尚は団十郎が狂歌狂句を好むという事を耳にして、趣味の点から、二三回寺内で面会した。その頃仙匡はさすが寄る年波で八十三四才になっていた筈である。

その頃の狂句というのは、現今のジャーナリズムと違って、所謂風雅悠長なものであって、仙匡に面会に出かけた、団十郎がいんぎんに頭を下げると、仙匡即座に白扇を出して「何か一句書きなさい」と言った、団十郎はほほ笑み乍ら筆を執って
ひらき見る扇は花のつぼみかな



話にならん

浪華の亀さん・伊予の亀さん

前田 伍健

昭和三十四年九月二十四日の朝日新聞に「はや言葉話にならん」で大阪の亀さんは「死んだ亀さんはなしにならん生きたカメさん手にあわん」と天王寺の放生池の亀のことがよく使われて云々ならんが今でもよく使われて云々の記事があった、そこでこちら伊予の亀さんの方は「死んで亀さん話にならん生きたカメさんの言わず」と言う言葉が昔から使われている、そのわけは松山市道後か

と筆を走らせ、頭を下げた。仙匡は又別な白扇を差出して、もう一句と出した折、団十郎は即座に二本とは与一もこまる扇かな

とすらすらと書いてのけた、与一とは那須の与一扇の的である。仙匡は俳優はその才能を讃えて、河原者と云う考えをすっかり消したと言う話もある。

私が病後の筆をとし寄りの日に持つと、妻が又かと言わんばかり鋭い視線が原稿紙の上へ私の肩をかすめて走る。はっとして、私は筆を止めて了。秋風が蕭々として窓をうって、裏の方の窓へ流れて裏の家の窓へ走って行く、流れゆく月日に合奏してからである。

ら目と鼻のところに右手寺がありそこから又一寸離れたところに溝の辺と言ったところがある時は江戸末期時代この溝の辺で素人角力があり沢山の見物が盛り上って土俵を囲んでわいわいやって居るところへ松山藩のあるサムライ(氏名もわかっておるが子孫や姻戚関係の人が現存しておるので加害者も被害者もわざと姓を伏せておく但し亀さんは実名である)が一杯機嫌でやって来て目の前に立ちふさ

がる男に「これっ百姓っ頭が邪魔だ坐われ」とどなった、附近に居たのがサムライの目見当からうっかり「おい亀さん坐れと言っとるぞ」この声が大きかったので同名の亀さんが「何れが邪魔だい」とやり返した、これをきいたサムライは「あのごこな無礼者がっ出て来いブツッ斬ってやる」勿論サムライは酔眼モッコウで対手が誰か見当が付かぬが「亀さん」の名は覚えていた「こら亀出て来い」この見暮に口返事した同名の亀さんはくびをすくめて人込みへ隠れたが最初に見物の邪魔と注意された亀さんが怖ろしくなって逃げ出した「おのれ逃げるか待てっ」と追かけた同名のためと行動のため妙な間違いになって口返事をした亀さんは人込みにかくれ、おとなし何にもとがめられるわけの無いカメさんが逃げ出したから目標がさっぱり見当外れとなった「待てっ亀っ」亀さんは一生懸命である走った走った、そして右手寺へ飛び込んで助けってくれと泣きついた「よしよし」と坊さんは引受けたが、やがて追付いて来たサムライが寺へ怒鳴り込ん抜刀であ

あれば寺に逃げ込んだ者は渡されぬ社奉行を経て受けとれと大見得きつたら坊さんは偉らく、伊予平方の唄にもこのころのだったが坊さんの腰弱く「へいこれらが亀です」の突き出したからたまらない一刀の元斬り殺された、村の人々は気の毒な亀さん罪もないのに斬られたと町重に道後湯の町から石手寺へ行く道の左側に小高い山があるその中腹へ溝の辺の方へ向けてお墓を作った。一方の亀さんは自分の口返事がもとで同名の亀さんが罪もなく斬られたのでその後気が変になり死んだとか、その当時から誰れ言うとなか、死んだ亀さん話にならん生きた亀さんもの言わずの言葉が流行し今にこの言葉が生きて日常伝わっている。大阪も同様に言葉の省略で「話にならん」と煎じつめた元はと言えば同名の亀さん二人からの事件であった「話にならん話のわけ」以上の通り話にならましようか。

野草千景の教室

会員募集

大阪クッキング スタジオ

堺筋本町二丁目南50米西側
ユニオン洋装店階上 TEL(25)4943



入門講座

研究課題「塵」

戸田古方

今回は川柳がどんな風にして出来るかということを集りました句をつかっのべてみたいと思います。

腹立ちの箒へ塵がまといいつき 歌子

川柳を俳句させる感動は、単に面白いか、美しいとか、調和を発見したというのでなくて、句主の琴線にふれ、これをゆりうごかすものをとらえ、充分に整理されねばなりません。写生といっても、見たものを見たままならべただけでは上の川柳とはなりにくいのです。感情だけをいくら燃やしたせてものにはなりません。批判とか価値判断とかの物差によって整理されねばならないのです。川柳は感情と理性とが適当に調和するときにはじめて発現します。したがって「いわざれば腹の

る子猫をあしらうことによって、句主の気持も読む方の心もなごめるのです。

塵なんか気にしておれぬ子 南天

ここまできると不愉快な「塵」は「塵」として、もうあまり「塵」には頓着していません。

塵だけで風呂がわかせる子 沢山

「塵」が客観的に見えはじめて来ました。

塵撒いて行く満載の塵芥車 生薑

「塵撒いて行く」は一見説明だけのようですが、句主はバタ屋の車から落ちる塵にリズムすら感じています。字づらや用語にはそれらしいものがないのに句意の上から感ずるリズムと言えましょう。

塵派手に散らして塵芥車が通り 堅持

私はこの句の「派手に撒らして」との句調のよきよりも、「塵撒いて」の「撒く」のつかい方のほうが好ましいと思います。それからやはり技巧の事ですが、

不夜城の裏手の川は塵芥 句念坊
より同じ句主の
ネオン映ゆる川面にちびた下駄が浮き
「不夜城」と「ネオン」、同じ上五のことはながら、概念的な、



(ありし日のおもかけ)

松江の雄 山川兎逝く

(大正二年十二月八日生)

戒名 浄信院釈昭義居士

山川兎・勝谷信義氏(46)は、九月四日に心筋硬塞症で入院し、同月十日午後二時十九分急死された。
入院一週間にして不帰の客となられ、遺族の方や柳友のこの急変に動地の思いであったことは、天痴人氏の原稿にも見受けられた。
昭和八年には川柳入門「三人集」等を発行し、十六年には川柳松江支部長、不朽洞会員などを経て大東亜戦争に応召され、二十年復員と同時に昭和六年から奉職していた松江市役所へ復職し、すぐに市役所の青年達を集め川柳指導に乗り出すという熱血人であった。
松江市役所に奉職中も長と名のつく椅子を十一も歴任され、松江市公営企業局長が氏の最後であった。
誰からも親しまれ人情の厚い人であった。老いた二両親、妻、二男一女という恵まれた家庭を遺したまま、ああ山川兎はどこへ行くのか。

山川兎句抄

秋の蚊のひよろひよろと本を去る

堅い感じのものより「ネオン」の方がはつきり色を見せてくれます。「塵芥」といかにもきたないぞときめつけられるより、静かに光を宿しながら浮いているちびた「下駄」一つでダイナミックに全体の空気や情景をあらわしている方を頂戴いたします。この句などは塵の美とでもいいますが。見すてられたものの価値と言うものも偶してもいます。川柳的独断の見方でしょうか。

掃除機に塵のせたまま塵を
追い 敏子

この句は小さな、しかし面白い見つけどころですが、機械の不便さをあざわらっています。ここまですると客観をこえて批判をしています。同じ句主が
「宿命の如く朝夕塵を追ひ」と出句していられますが、小説と論文ほどのちがいです。

山となる塵にたとえて貯金
させ 和菜

句としてはまだ稚拙ですが、生命の垢ともいべき塵の本質を考へさせます。

塵積つて山となるという理
屈 静観堂

「塵も積れば山となる」という格言に真実があるからでしょうが、「理屈」というどうにもならぬことばを上手につかひこなしていられます。この「理屈」の中にいかにも「塵」の本質にふれるも

のが感じられます。

塵一つ落さぬ母に気が疲れ
至高

塵一つ見せず旧家の拭きこ
一鶴
まれ

塵一つない応接間で落着け
たもつ
ず

四句とも上五は「塵一つ」とな
っています。塵のある世の中に塵
のない状態、それは理想にちが
ありません。したがって、そのた
めに払われる努力はなみたくてい
ではありますまい。しかし、それ
をはめる心のかたわらに非人間の
なものもちよびり出てくるので
す。勿論程度の問題ではありまし
ようが、少しは塵のある方が人間
らしいのかもしれない。それな
ればこそ「気も疲れ」ましよう
し、「落ち着け」なくもなるでし
よう。「旧家」の拭きこまれた板
間はころよいものですが、これ
は豪家より、ささやかな農家に見
立てた方が一そう美しいのでし
ょう。

私は最後の岡甫さんの「独り
者」の淋しがる気持ちに一番共鳴で
きそうです。ここまで来てホッと
一息というところです。「塵一つ
ない」不自然さのなかに川柳らし
い笑いの発見がちらちらはじめ
てくるのです。

塵かごに叱る言葉を書きつ

保夫

「叱る言葉」は実にむづかしい
ものです。躰けとか、保護すると
かいて叱りますが、感情の交ら
ない叱り方の出来る人は何人いる
でしょう。真実を教えることのむ
づかしさ、人間の悲劇であると同
時に喜劇であるところに川柳の醍
醐味があるでしょう。叱りことば
の反故は塵として捨てられてゆき
ます。笑の表現もだいい分高度化さ
れてきました。

梅み受ける硯の塵払い磨る
八九寸

筆書きの出来る人の数はへって
ゆきます。冠婚葬祭にはそうもゆ
きません。掃除機の塵のような
こまか
細い芸でなく、もっと大味な句で
す。そして人間のおろかさや静か
に自嘲しているのです。そして最
後に

塵捨て場二葉可愛く延びて
いる 万女

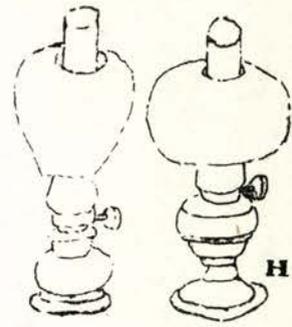
もう二十年にもなりますか、廃
墟の中に二葉をみつけるラストシ
ーンの映画を見たことがあります
た。だんだん句が大きくのびやか
になってきます。よき未来を信じ
る建設的なものを感じるのです。

研究課題 「人間」
切 十一月十五日

発 表 二月号予定
送り先 豊中市本町三丁目二〇一

戸田古方

松の内いい父さんになっておこ
働けば四囲は輝くものばかり
好きな人書類をほんど置いてゆき
幽霊が出る本堂の広さなり
さくらんぼみんな帰ってビヤノの音
人間のいろはにはほへともう四十
父さんが聞いても母さん好きと云い
暖冬の松江大橋柳の芽
あれだけの努力盲判を押され
文化の日大きく城が撮される
事前運動死亡広告に目を通し
自転車は預けて帰る令になり
昨晚の酔を子供に真似られる
雲が目につき腹が減ってくる
埋立ての好きな役人ばかりおり
かくて朝露にぬれてる事故現場
風の色見えるよに云うバスガイド
だし昆布の如く停年すてられる
百貨店の隣りでネクタイ投げ売りし
団体を迎える出雲雪となり
出張の予定の中にプロ野球
絶句
もう秋か冷しビールが齒にあたり



居留守

市場没食子選

奥さんは留守人間は嫌いです
 秘書が事情を知っている居留守
 居留守だと判るに下駄まで隠しとき
 親友に居留守使われるのも落目
 裏口で居留守したのを覗かれる
 居らん筈ないがと思ふ勝手口
 これ以上居留守と言えぬ義理を
 電話口居留守の声も混つて来
 その返事まったと居留守もう忘れ
 押売へママは留守だと子の機転
 集金のねばりへ居留守顔を出し
 尻長か今日はせわしい留守と言え
 温泉とふれた手前で居留守きめ
 まだ帰りまへんと悪友あしらわれ
 しまった居留守駅まで追つて来る
 居留守して女の氣持確める 保夫

女目が醒めず居留守をまだ信じ
 飲み仲間へ居留守の尻がこぼれし
 末っ子が口すべらして居留守ばれ
 居留守を使われながらも通いつめ
 今たしか帰った筈がもう居留守
 方便の居留守に妻の知恵をかり
 居ませんと奥を氣使う世帯ずれ
 度々の無心居留守を使われる
 居留守がばれた頓智の胃瘵れん
 処世術ですと居留守の悪びれず
 秘書役の氣転で留守にして返し
 叔母が来て居留守がはれる内輪もめ
 パトロンに居留守がトんで出る
 風鈴の方へ居留守は目をそらせ
 次の間で居留守クシャミをかまころし
 命日と言う今日は居留守に乗りぬ腰
 うっかりと居留守受話器を握るなり
 あと戻りすれば居留守の顔に逢い
 御都合で不在ともなる電話口
 紹介の名刺居留守で涉どらず

堅持 堅持 きたえ たくお 梢月 尚史 無閑 代仕男 雄声 八九寸 兼治郎 藤波 雪峰 一声 生薑 美音子 古心 圭木 悦子 進之助 圭井堂

路

集

居留守を見抜いて陳情団坐り込み
 文関で居留守へ聞える声を出し
 得のない相手で居留守使つとき
 居留守使えば借金取りに居直られ
 辻まが合わず居留守を見破られ
 居留守まで使つて百円貸ししがり
 今帰ったように亭主が顔を出し
 電話口そばで居留守が知恵をつけ
 留守だと見え金庫は空っぽだ
 母と子の口が居留守に喰い違い
 どおやつたと居留守のこの顔を出し
 ボロウに言われて居留守踊り出る
 居留守など古いですと先手うち
 度々の居留守集金夜にする
 金を借る弱味居留守へ日参し
 陳情団居留守へでんと坐り込み
 別宅へ留守と言わせぬ客が来る
 居りますと申しましたと済まそう
 電話口鼻をつまんで留守にする
 非礼とは知りつつ居留守原稿紙
 落選のそれからどなたにも会わず
 言訳をさして居留守二日酔
 記者団へ居留守も使う時の人
 文関の声に居留守が耳を立て
 うるさいな何の用か居留守が出
 本当の留守をいつもの手と思ひ

一鶴 どんたく 笑太 狂二 秀峰 実男 陽子 昌男 萊春 九呂平 庸佑 たもつ 妖人 兎康 井蛙 宗太郎 愛鳩 巖 恵二朗 不村 一鶴 一休 進之助 十九平 光郎 智津子 雄々 保美

帰るまで待つと居留守をあわてさせ
 惚れている弱味居留守と知りながら
 親の氣も知らず返信とんと来ず
 返信は芽出度い話になりそう
 折返しとある通信は金が要り
 返信をほんに淋しいように書き
 代筆で返信経過良しとあり
 すぐらんも入れて内地へ出す返事
 電文の様な兄貴の返事なり
 返信は姓が変つたことも書き
 返信の五行恩師の愛が満ち
 香水をふって嬉しい返信よ
 半分も返信のないクラス会
 返信へお礼のことは見当らず
 返信に胸はずませて封を切り
 返信は親孝行な事も書き
 返信に頼んだことは書いてなし
 ことわりの返信女房に書かした
 返信の泣き言哀れとも思ひ
 誘惑の網にかかった返事が来
 返信の終りの方でのろけられ
 返信を待ってる旅の無一文
 返信へ転居のわびも小さく書き
 返信へ妻の意見も書いておき
 代筆で断つて来たプロポーズ
 返待つと父の手紙ににらまれる

不村 万女 進之助 可住 一鶴 敬太 木魚 独仙 三舟 圭井堂 幽谷 陽子 笑太 白葩 至高 九呂平 萊春 南牛史 山椒坊 淀月 夜潮 梢月 參無子

返信

小川恒明選

催促をすれば返信版を立て 無閑
 返信料まで添えて詐欺に引つかかり 吉枝
 又貸せかと返信放つとかれ 光郎
 返信と一緒に履歴書が帰り 保美
 片思いでなかった返事読み直し 鶴汀
 金を借る弱味返信料も添え 井蛙
 切々のファンレターへサインだけ 八九寸
 返信の飲もうと云う字見逃さず 徹也
 返信に押花も入れ恋進む 兼治郎
 代筆で出せば代筆で来た返事 雄々
 弁護士知恵で返信抜け目なし 藤波
 返信は片仮名で来た母の筆 雄声
 返信へ妻も一筆書き添える 愛鳩
 返信は稲の出来まで書き添える 涼人
 返信の葉書クイズに使われる むじな
 返信へ味しめて書くラブレター 雪峰
 上役へする返信は気が疲れ 代仕男
 通訳がいるよな母の返事来る さかえ
 返信はサイン入りなるプロマイド 蘭
 返信へ孫の清書も入れてあり 旭峰
 飲む会の返信なればすぐに書き 孝風
 独得の字画で返信読めぬなり 同
 筆まめに返信たのしくフィアンセ 敏子
 返信は来たが見当 違いなり 十九平
 プロポーズ断るベンの重いこと 惠二朗
 待っていることにはふれぬ返事が来 圭木
 返信を受けて夜逃げの気が変り 茲雨
 佳
 代筆の返信 他 人行儀めき 惠二朗
 要点をぼかした返信しか書けず 十九平
 返信の嬉しい重み確かめる 登紀

事故

石川侃流洞選

返信は電報にして發つ羽田 井蛙
 返信へ要点簡条書にされ 美音子
 返信はうるさい条件つけて来る 智津子
 返信が来てから仲がまずくなり 保夫
 おそらくは来ない返信妻も待ち 昌男
 返信を困んで汽車の時間表 蜻蛉
 人
 返信をファン宅のように持ち 実男
 地
 頼りないひとで往復ハガキにし 越舟
 天
 母へ出す返信ふりがなつけておき 豊年
 軸
 返信は八方美人のお人柄

遭難の浜に焚火の夜が明け 光郎
 自動車の事故は又かとほつとかれ 雄声
 事故現場お地蔵さんは無表情 進之助
 一応は理くつを云うて叱る事故 智津子
 転動の辞令に事故の責が見え 木魚
 事故現場交通整理で太重 繁太郎
 事故もなく取得も無うて平社員 蛙木
 事故現場虫も悲しく鳴いており 圭木
 事故という程ではないのに左遷され 旭峰
 野次馬が真先馳せる事故現場 妖人
 先代も事故でしたねと尋ねられ 北海坊
 ほろくそに云われただけで済んだ事故 南天
 事故現場新聞記者の早いこと 弘朗

遮断機と十年無事故の風を吸い 昌男
 事故起きた場合と大げさな事を云い 敬太
 講演の順をくるわす電車事故 淀月
 夕焼が悲惨に見せる事故現場 鶴汀
 事故でさえなけりやよいと案じられ 卯之助
 貧乏くじ引いたと思ふ事故に遇い 保夫
 事故係あやまるコツを知つておち 句念坊
 事故丸く済ませてもらう包み紙 雪峰
 あの時の事故がとりもついい話 同
 事故現場うつした写真非難され 梢月
 三面の事故からブラン立て直し 藤波
 事故の数グラフにしてる職もあり 徹也
 デカの感事故死の糸がもつれ出し 慈雨
 ベテランの無謀に近い登山事故 代仕男
 ブレーキを魔の踏切へ固く持ち 同
 事故防止対策ポスター貼つただけ 宗太郎
 一分の遅速が事故になるダイヤ たもつ
 事故あつて小さな駅の名が知られ 千里坊
 成田山のお札が破れただけの事故 保美
 事故でなくてよかつたけれど酔つて来る 涼人
 表彰をされて事故のノイローゼ 智津子
 肩越しに何や何やと事故現場 秀峰
 軽傷のベッドで事故の記事をとり 愛鳩
 大阪の事故をおしえて旅に出し 雄々
 胴体着陸待つ空港のあわただし 堅持
 事故現場保守のチェック本を書き 光郎
 本場の事故をストライキとちがえ 陽子
 停年へ無事故で着いただけのこと どんたく
 巻尺で巡査は事故をたしかめる 兼治郎
 事故現場カメラ非情な目で捉え 菜春
 駐在日誌無事故と書いて餌をすり 惠二朗

品質優良
先カペン
 TACHIHAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画鋏

大阪市東区船場二丁目十二番地
 大川ペン先株式会社



部下がした事故に寿命を縮められ 幽谷
 事故現場マイクへ奇跡の声をよめ 井蛙
 事故のない村の駐在瓜を切り 笑太
 五客
 事故現場取材の記者が邪魔がられ 十九平
 一寸した事故だと幹部へにこまれる 昌男
 隣がばれてしまった事故が出来 南牛史
 事故現場巡査が少し昂奮し 幽谷
 危険箇所幾つも過ぎてからの事故 八九寸
 人
 無いはずの予算が事故で繰り出され 静水
 遭難の奇跡を母は信じたし 豊年
 天
 なんやもう動き出したと事故現場 和三郎
 軸
 宿直の無事故に明けて陽がまぶし

柳界 展望

旬会

▼本社十
月旬会
は七日
(土)午後
六時から

(大阪市)は十月二十九日(木)
午後六時半から難波の親和クラブ
で開催。▼大阪市民文化祭第十一
回川柳大会は十月二十五日(日)
午前十一時から毎日新聞大阪本社
講堂で開催。以上路郎主幹出席。

道頓堀文楽座別館で開催する。文
化の月の一夕を作句の醍醐味に浸
っていたきたい。一人が一人誘

▼岸和田市民文化祭参加「きしせ
ん」十周年記念第十回川柳大会は
十月十八日(日)午後一時から宮



杏林川柳会 (大阪)は満十周年に表彰せられた一哲氏が感謝の会九月廿二日に牟田病院三階講堂
で催された 左端一哲医博・中央路郎師・右端生々庵医博(会場の一部)

海電鉄川柳旬会

後二時から五階会
議室で開催。▼南

病院川柳会は十月
二十四日(土)午

開催。▼大阪通信

から黒田国光堂で

市)は十月十六日

(金)午後五時半

中島小児科診療院

楼上で開催。▼コ

クヨ川柳会(大阪

市)は十月十六日

午後六時から

川柳文化祭第二十回京浜川

柳大会は十

一月三日正

午から東京

都千代田区

六番町番町

小学校講堂

で開催。宿

願年の功・

俗人・陥し

穴・氏神・

吉葉・控え目・瓦・魔がさす

柳人諸氏と歓談された。▼中島紫

宛は五十円封入の上十月二十五日

今や紅葉の最盛りであると、又ス

キーをしなくてもリフトで高く昇

るだけでも別天地の感がすると冬

のお誘いがあった。▼小西無鬼氏

(兵庫県)宅が十五号台風で床下



前列右より東岸・幸仙・龍泉・万女・正州・あやめ・
後列右より水沢・やま子・一平・はるえ・柳風子・清春(東岸写)

消 息

催され、緑之助、天痴人氏等も参

催された。

山川児氏の追悼旬会を山川児居で

開催。▼水谷竹荘氏(大阪市)は

九月二十八日熱海温泉に遊ばれ、

伊東、下田、修善寺、伊豆長岡の

各温泉を回られると。▼富士野鞍

馬氏(京都市)は最近腰痛のた

め、外出も出来ずひたすら静養さ

歌・俳句・詩・川柳)の作品展の

会場へ出席、来会の詩人俳人歌人

川柳 備前支部八月例会 (水鏡照)

本町会館で開催。▼岡山電報局ゆ

め旬会は九月十三日法院居で開

催。▼川維西宮支部明和川柳研究

会甲南川柳教室合同吟行は十月十

一日あやめ池公民館で開催。▼川

維岡山支部旬会は十月十七日午後

二時から久米雄居で開催された。

▼広島川柳会第二例会は十月十五

日午後六時から広島駅会議室で開

催。▼川柳文化祭第二十回京浜川

柳大会は十

一月三日正

午から東京

都千代田区

六番町番町

小学校講堂

で開催。宿

願年の功・

俗人・陥し



お買物は…
清く
明るく
美しい

大阪梅田・水曜定休
阪神
電大代表(36) 1201

柳人諸氏と歓談された。▼中島紫
宛は五十円封入の上十月二十五日
今や紅葉の最盛りであると、又ス
キーをしなくてもリフトで高く昇
るだけでも別天地の感がすると冬
のお誘いがあった。▼小西無鬼氏
(兵庫県)宅が十五号台風で床下
浸水、西田初穂さん宅は床上浸水
した由。無鬼氏は又篠山町議会の
災害対策委員で日夜奔走されてい
ると。▼水谷竹荘氏(大阪市)は
九月二十八日熱海温泉に遊ばれ、
伊東、下田、修善寺、伊豆長岡の
各温泉を回られると。▼富士野鞍
馬氏(京都市)は最近腰痛のた
め、外出も出来ずひたすら静養さ
歌・俳句・詩・川柳)の作品展の
会場へ出席、来会の詩人俳人歌人

不朽洞の人々



三和自動車工業にて（明中）

慶弔

品個展が十月十二日から十六日まで梅田画廊で開催された。▼福田多可志氏（鳥取県）は九月二十二日に開腹手術をされたが、その後の経過良好、十月九日に退院された。▼路郎主幹（本社）は十月十九日の大阪市の文化賞受賞者推薦委員会へ出席された。

句集

▼国鉄川柳句集一九五九年版が九月一日第三句集として全国鉄川柳人連盟（東京都太田区本蒲三ノ一三国鉄蒲田駅内）から刊行された。B版百三十二頁 定価百五十円。

▼土井文輝氏（大阪市）二女尚子

さんは十月六日宮本武次氏と天六

市民会館で華燭の典を挙げられ

た。お祝い申し上げます。▼西尾

栞氏（大阪市）の長男舜介氏は十

月八日柴田妙子さんと大阪高島屋

蓬萊殿で華燭の典を挙げられた。

▼田中千鶴氏（貝塚市）千石荘で

療養中、十月四日風邪のこじれが

因で死去、行年二十五、謹悼。

転居

▼岩原箔川氏は宇都本市西区上町四

丁防長商事裏、藤本方へ移居。

飛・燕・往・来

☆東野大八氏より（美濃加茂市）

1 路郎 宛

信州の旅おつかれさまでござい

ましたでしょう。旅も結構ですが

行きかえりが大変で、眼と鼻の先

の信州もまだ一度も参ったことが

ございません。何かお目もじか

なえばと思っていきましたが。来

年あたりは岐阜だけでもお出で願

えればと存じています。

さて本日は結構な新刊本を御恵

贈頂きました。有難うございます。

早速夜通しかけて拝見いたしました。

「親ごころ子心」は大変結構

な句で感動の集積といった形です。

た。家内も胸一ぱいになったと、

拾い読みの程度ですけれども胸を

うたれた様です。刊行の企画面か

らみても有意義なことと存じま

す。「新川柳鑑賞」は先生の独壇

上だけに若い社員がねっから手離

さず「川柳とはこれですか」と手

放しでした。お礼まで。

不朽洞

常任理事会——九

月二十七日午後七時

から三休橋南詰西入

会から

中島小児科診療院附

上で開催。路郎・文輝・多久志・

好郎・梅里・潮花・いわをの諸氏

出席。

一、大阪市民川柳大会係委員依

自動車のことは

分らぬ社長にて

（摩太郎）

自嘲の句であるが世の社長に与える諷刺句でもある。社長は修理のことは分らない。運ちゃんに、つかませねば整備工場は、受注に影響する。

いくら自動車屋でも、かつて尻からげして、田舎道を歩いた亡き母を思うと勿体ない気で乗る気にならない。胎のように引きのぼして呉れた母の写真を乗せて高野山に詣でたい。木静かならんとすれど風止まずか……嗚呼

嘱の件

一、本社句会会場係の件

一、本社句会倍加運動の件

一、常任理事増加の件

一、理事会総会開催の件

一、理事会総会開散の件

★新役員紹介

十月

★新役員紹介

藤村梨花（大阪市）正会員

——腹乃女史推薦

富永夢路（相生市）正会員

——青一路氏推薦

株式会社 丸越

瓦斯器具
電気器具
雑貨
洋装
靴品
家庭用品
呉服
婦人服
紳士服

大阪市阿倍野区阿倍野橋三丁目六〇
電話 或 3357・3958
大阪市住吉区長狭町三五
電話 4985・4986
大阪市東区平野新町三丁目一
電話 東住吉 2110
大阪府都島区都島本通三丁目104
電話 堀川 7459
大阪府豊野町東一丁目一
電話 豊野 2局 3587・1600

月賦のデパート

良い安い買よい 十月月私
アベノ住平都塚
紳士服 店 店 店
婦人服 店 店 店
呉服 店 店 店



▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 十月句会 (大阪市)

10月12日 午後六時

会場——文楽座別館四階

行楽シーズンの日曜明けとあって女流作家の出席がわるいがそれでも二年連続を狙う葉乙女さんはお元氣だ。七年連続の大記録を目標に淡舟氏の欠席はどうしたことか。文蝶不朽洞会理事長から本年の出席率良好の支部を表彰するという出席倍加運動の狼火をあげられた。

まず戸田古方氏の柳話から十月句会の幕があく。「私のいいたいことをいっている句」と題されて、酔舛・花村・粗影・旭童・きさ子諸氏の句が引用された。(十二月号発表)

天位受賞者は古豪・新人と入り乱れ、十四郎氏、山椒坊氏の進出は刮目ものである。新人胸を張るべし。

十月の不朽洞杯はベテラン友淵貴山氏の手に舞った。本年はまだ二回獲得者が出ないのでベナントの行方は全然わからないところに興味もたれる。(F)

出席者—路郎・句念坊・水堂・一三夫・いさむ・摩太郎・和楽・古方・すむ・旅風・在二・文秋・与呂志・梅志・十四郎・一瓢・舟遊・いわを・柳宏子・正一・

阿茶・一十・万楽・白水・文蝶・泰・静馬・敬也・堰子・多久志・凡吉・花草・白溪子・高志・水客・薰風子・保美・鶴汀・亜鈍・酔舛・葉乙女・三司・敏明・清人・昇・庸佑・梅里・貴山・半歩・光輪・潮花・六童子・牧人・満秋・白柳・宏子・霞乃

兼題「ワンマン」 土井文蝶選

ワンマンの欠けた会議がまたもつれ 八九寸
ワンマンは他社の争議も気に喰わず
ワンマンの咳で社員の声はそり
ワンマンカーがちやがちやと釣がくる
ワンマンも人間今日は笑うてはる
ワンマンの机否決の箱はから
前任のワンマン成る程など判り
ワンマンの地声便所へまできこえ
喋るだけ喋ってワンマン席をたち
銀婚を迎えワンマンまだ続き
ワンマンの社長へけつわうどんが米
民主主義説いて家でワンマンさ
相談をすればワンマン即決し
ワンマンで養生なんぞしておれず
ワンマンへ婦権むなくかしこまり
ワンマンの一声会場をしんとさせ
とりまきワンマン調に育て上げ
ワンマンも故人になると親しまれ
ワンマンカーおつらばらに動き出し
ワンマンがいじめられる小唄かな
ワンマンも医者へ素直になつて聞き
妻としてそのワンマンが頼もしい
時代には勝てワンマン引き下がり
ワンマンはワンマンだけの腕が利き
ワンマンはガキ大将にさも似たり
中風になつてもワンマンおさまらず
ワンマンが会長でいて社長ひま
ワンマンは私生活まで干渉し
結論が出ずワンマンが来るを待ち

一瓢 阿茶 十四郎 敬也 鶴汀 保美 花車 一三夫 蘭 中風 阿茶 十四郎 敬也 鶴汀 保美 花車 一三夫 蘭

ワンマンと言ふ名を背にして葉巻吸う 与呂志
ワンマンでよし働いて来た夫 保美
ワンマンを鼻でわらつた設計課 旅風
バトカーがワンマンのように独走し 和楽
ワンマンがまだごてて契約金 柳宏子
ワンマンの故に動かぬ屋台骨 梅里
酔客がワンマンカーを手占す 徹也
労働歌もワンマンの手に負えず
困つたらみなワンマンに訊ねに来
難題をワンマンそつと相談し 陽子
望楼でワンマン気取り胸を張り 阿茶
ワンマンが割つた手形でけつます 井平
ワンマンもやつぱり相談役を置き 半歩
ワンマンも女に甘い金を出し 三司
ワンマンの痛い尻尾を握つて居 雄声
ワンマンとせしめられるを自慢にし 一十
陰口を知らぬでもなし独裁者 晃
ワンマンの一徹釈明許さない 牧人
ワンマンの苦手奥さまから電話 万楽
ワンマンは神も仏もじやまになり 貴山
無い物はないワンマン振り向かず 文蝶

兼題「戀人」 正本水客選

恋人といふからロイズ色の空 舟遊
恋人へお寝みだけを言う電話 三司
恋人の家へこの道つづいとり 多久志
恋人の無口をとても素敵があり 雄声
ラブレターその場で封を切らぬもの 万楽
恋人の無口になれて会いつづけ 白溪子
恋人と邪推されたを笑い合ひ 宏子
恋人の父と肝胆相照し 一瓢
恋人に無性に逢いたい雨が降る すむ
恋人に成つてあげるとからかう気 雄声
恋人と言う間隔の 話声 葉乙女
恋人の忠告ふんふんふんと聞き どんた
恋人に見合いをすと打診する 庸佑
恋人の地味な好きが気に入られ 白溪子
恋人のあの一言に未だ迷い 鶴汀

いつまでも待つと恋人泣いてくれ 陽子
恋人へある日は家系など話し 保美
恋人が出来て妹うとまれる 静馬
恋人気取りで兄妹腕を組む 一瓢
恋人が心を試す事を言い 鶴汀
片意地に成つた恋人ぬれて行く 雄声
恋人へ思わせぶりな回れ右 阿茶
ビケイン張るにも恋人と肩を組み 蘭
恋人のまつ毛が濡れて死にとり 潮花
ガールフレンドみな恋人と思つて母 参無子
姉ちゃんの恋人だんだんケチになり 堰子
恋人がしがみついているオートバイ 圭井堂
恋人の名前と列べて書いてみる 山椒坊
恋人でもないのに連れてこい連れて来い 水客

兼題「鏡台」 友淵貴山選

鏡台へ見せぬ素顔を女見せ 寿栄
逢ひきの顔作るのに姫鏡台 繁太郎
鏡台を覗けば親の顔があり 柳宏子
鏡台がボンと隅に旅の朝 すむ
鏡台の中にはずれたくじがあり 晃
春の宵鏡台だけが知つており 多久志
鏡台へ舞の手つきも写してみ 宏子
鏡台へこん夜の稼ぎ誓つて出 多久志
鏡台が男の弱味衝いて来る 六童子
ボリュウムに三面鏡が狭まざる 十四郎
鏡台へもの言うてみる淋しい日 宏子
鏡台は女性解放するところ 亜鈍
鏡台の妻無防禦な背を見せ 生薑
鏡台へ写す眉毛のないう素顔 南宗
鏡台も美人の顔に飽きもせず 文秋
鏡台へ無理な望みのバツを持ち 一瓢
嫉妬した顔も知つて三面鏡 参無子
鏡台はやや兎泣こうがわめこうが 一三夫
この年をもう鏡台が容赦せず 徹也
何事もなかつたように見る鏡台 陽子
鏡台へ座つてからの口こたえ 三司
中学がいつしか鏡台見つめ出し 和楽

鏡台の前で女としての母 参無子
 退院の妻へ鏡台拭いておき 幽谷
 鏡台のこんな化粧物がいり 雄声
 華かに塗って鏡台派手に閉め 圭井堂
 鏡台に順番がある 二女三女 潮花
 鏡台を男がもてばこけかき 梅志
 鏡台を見ず走り出す妻 パーマ 正一
 鏡台を見ず刺るのが自慢なり 静馬
 返事だけして鏡台は離れない 旅風
 鏡台がピカピカ光り 緑遠く 晃
 鏡台も名優と知る 光りよう 一三夫
 大部屋の鏡台半の皮も 乗り 坂子
 鏡台の引出し二人っきりのもの 多久志
 鏡台を持たねば立てん程すわり 敏明
 鏡台の男の櫛は折れたまま 三司
 鏡台も古び老婆なぞと呼び 潮花
 せき立てる顔が鏡台まともなり 貴山

兼題「運命」 真鍋一瓢選

運根鈍鉢ばかりで平社員 静馬
 十円で大吉の運賃いもとめ どんたく
 運勢が開けますよとガード下 蘭
 運命のように女房に敷かれと 陽子
 離れ更け妓の運命を雨に聞く 八九寸
 天才の運命病んでばかりおり いさむ
 ろうそくの灯に開運の道を開き 梅里
 運命を賭けて母子寮嫁くと決め 一三夫
 死に行く母へ素直に手をとられ 潮花
 父の意に添う運命のつのかくし 潮花
 ブラジルへ運命かけたドラが鳴り 坂子
 運命がハッピーエンドにしてくれず 南宗
 運命でしようと思いを言うて去に 幽谷
 運命とあきらめ金の方へ嫁き 舟遊
 運命にしては冷たいひとと添い 潮花
 一枚の辞令 運命左右して 白水
 飄々然として運命の外に生き 高志
 給料を運ぶ 運命とは淋し 三司
 鈴振って運命換える 神頼み 多久志
 運だめし結局スツテンテンになり 梅里
 運命の高潮は防波堤を越え 一瓢

席題「秘書」 八木肇天郎選

奥さんの電話へ秘書のあわてよう 六童子
 女秘書辞めて二号の身で暮し 鶴汀
 運転手と秘書を味方にして遊び 万葉
 秘書はもう社長夫人をこわがらす 潮花
 本人の知らぬ裏で秘書が受け 阿茶
 随行の秘書畑爛と羽田発ち 梅里
 社長秘書になつた娘に養われ 静馬
 公明正大に温泉へ秘書を連れ 水客
 女秘書遊ばす法も教書えられ 静馬
 クビにした秘書から汚職ばれて来る 清人
 秘書の耳昨帰らぬことも知り 白水
 情けない用も秘書役言いつかり 舟遊
 秘書として社長のいやなことも言う 和楽
 秘書変わるたびに奥様逢うてみる 和楽
 自動車の運転秘書として習い いさむ

席題「手料理」 佐野白水選

手土産を持たせために秘書を連れ 白溪子
 憶測の中にシャーシャー女秘書 万葉
 売店の前をツンツン女秘書 梅志
 よろめいて秘書もけむたいものになり 文秋
 恐妻の社長の秘書は男にて 与呂志
 秘書の眼に只の女でない素振り 白水
 秘書して言うたらいやな眼で見られ 潮花
 秘書まで寸志と書いた包紙 貴山
 かくし芸の用意も秘書は心得る 万葉
 縁切りの金を渡すも秘書の役 与呂志
 秘書として酒のおともをする 凡吉
 暖かい一つに秘書の腰が浮き 柳宏子
 奥さんのひと声秘書の首が飛び 坂子
 社長秘書女の筋を撰りわけ 亜鈍
 女秘書ときどき肩もたたかされ 一三夫
 ライターはちゃんと持つて女秘書 鶴汀
 秘書一人社長の恋をあぶながら 花車
 二号郎の方へも秘書は気をくばり 摩天郎

ヨクヨ 便箋

手料理で依りの見合いも無事にすま 阿茶
 珍らしい手料理山は山の味 阿茶
 手料理で秋の祭りをもてなされ 潮花
 刺烹学校まで出た手料理でこれい 庸佑
 手料理に何時か家風の味がしみ 高志
 手料理をほめて奥さんの酌をうけ 清人
 一泊の寺でおいしいきょうりもみ 梅志
 手料理は何か忘れた味の まま いわを
 娘の料理月謝をかけた味に出来 保美
 手料理をほめたとなん石を噛み 堰子
 手料理のまずさへ養子観念し 一三夫
 手料理で同窓二人夜を更かし 文蝶
 出戻りの娘の手料理が口に合 水客

席題「いけす」 金井文秋選

いけす今おつにすまして恋らしい 満秋
 ちゃっかりいけす秘書課の女ども 梅志
 寄付の額隣りのいけすに出し抜かれ 一瓢

そのいけず親はしつかり者とう
 又いけずされて狐娘な子が帰り
 口論で負ければいけず席を立ち
 どいけず又女の毒な聲が着き
 先生が小さいいけずもてあまし
 いけずした娘とは見えな日本髪
 うちの子はいけずでないと言ういけず
 大欠伸していけず言葉消しておき
 校庭の隅でいけずははつとかれ
 児のいけず嫁が教えたように言い
 両方がいけずし合うて泣いて居り
 いけずの娘妻にも憶えあると言う
 いけずした淋しさ街の灯を歩き
 たよらない恋人いけず言いと
 あ頃のいけずも優しい人の母
 小姑のいけず気がなげうけな
 さりげなき顔はいけずをした娘
 こいちやんのいけず乳母は願を
 器量よく生まれいけずの眼でみ
 スリッパを靴とて行くいけず
 恋人がどうやらいけず分り
 あの人にあらぬいけずな子が生れ
 泣かされて帰るいけずする
 先生の可愛い子がいけずなり
 いけずされても親のいけず泣かず
 お隣の犬もいけず寄つつかず
 からかえばいけず負けて舌を出し
 その中のいけずの耳を借るいけず
 いけずには他人のいけず目立ち
 若い女の仕さいけずな眼にぐみ
 その伸をいけず別に始いで居る
 ふといけずしてから借りを思い出し

保美 徹也 与呂志 堰子 凡吉 万楽 水客 三司 静馬 柳宏子 保美 潮花 舟遊 醉舛 水堂 正一 阿茶 木堂 葉乙女 梅志 清人 一十 多久志 一十 葉乙女 半歩 万楽 高秋 高志 六童子 十四郎

川 雑
 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

紅椿鳴のアンコが瞳に浮ぶ紅茶
 欠伸して口紅の人道を行く緑星

川 雑
 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

口紅の美しい嘘聞いてやり
 四十後家紅白粉で疑われ
 プレゼント紅を贈つて窓に勝ち
 冷戦のものはシャツの紅にあり
 我が家を出てから紅をつけ直し
 紅白粉つけていつしか娘は替り
 本心を吐かせて見た紅の色
 負けぬ気の二号見返す紅も濃く
 あの時へ行かんと紅を塗り
 もう紅もつけます初七日すぎました
 姿見へ自己陶醉の紅を引き

吟声 浪之助 弦月 平八郎 泉木 紅溪 晚舟 快夢起 旋風 魔花麗 柳葉

川 雑
 玉造支部句会 (大阪市)

西出一米報

相談の用意があると折れてくる
 相談にのろやないかと選挙前
 メニュー見て財布調べる子供連れ
 食堂を出たら坊やは去にたがり
 病院に逆戻りして友が増え

文秋 清子 清信 井平

川 雑
 淀川支部句会 (大阪市)

木村水堂報

捨てるには惜しいガラクタ又仕舞い
 食堂で料理の食べ方やってみせ
 ガラクタに磨きをかけて茶人ぶり
 ガラクタに夢が生きているオモチャ箱

柳宏子 勝一 句念坊 直人

川 雑
 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

ターミナルまだ飲み足らぬ二三人
 ターミナル乞食は同じ位置に居り
 ターミナル国の訛りにかり返えり
 綺麗なの呼んで雲行きかわりかけ
 自他共に許す血の気がほつとけず
 求職の靴がすべった大理石
 自家用でほんぼん職を頼みに来
 勤め口下宿のお釜に付き添われ
 求職にすると中学いじらしい
 求職へ吊皮は皆はたららく手
 空家らし呼鈴だらりと首を垂れ
 呼鈴は留守を知らせて鳴りつけ

満潮 利男 菁風 保美 旅風 編汀 堰子 白柳 千尋 三舟 舟遊

色紙短冊
 書画用品

大坂戎がし
 丹月堂
 電話セニセニ

川 雑
 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

急患へ呼鈴だけでは起きて来ず
 よひりんでちかちかのテレビも終つちやた
 怪我人を催促しての救急車
 その若き怪我の功名とは言わす
 子供等の真似も淋しい松葉杖
 ちよつとした怪我へ縫物渉らず
 恩節訪う呼鈴かるく押し待つ

蘭 慎太郎 晃 蕨風子 歌子 敏子 梅志

生々庵

冷蔵庫まで来て電化一呼吸 信太郎
御近所のお菜がつまる冷蔵庫 狂二
冷蔵庫朝の米は僕が入れ 古方
冷蔵庫上に蠅取紙をおき 貴山
犯人は末っ子らしい足の跡 慶天郎
恋心今日も二の足三の足 高志

川雑 出雲支部句会 (島根県)

尼 緑之助報

補欠みたいに六人目が生れ 雲平
現ナマの力かない返事する 緑之助
土壇場に生きた思案の何もなし 章道
土壇場に来て野育ちは気が強し 三又路
薄情な人だと土壇場で悟り 畔子
タクシーの屋根が気になる高島田 朱紅
割勘のタクシーバス代並となり 政子
ゴルフの疲れたなあとタクシーカーする 白菊
後梅の一夜実家で過すなり 外樹
家出した後梅交番の灯がまぶし 独仙
後梅の女の影が動かない 章峰
後梅のやり場小雨について出る 李明

川雑 京都支部句会 (京都市)

田中烏雀報

俄か雨夜店慌てるだけ慌て 春抄
良心の濡れたを乾すに場所がない 海三
街娼婦の泣かない肩が露に濡れ 磯
看護婦の続かぬ訳を妻知らず 句念坊
容体をきくにに医者を送りに出 白扇
聴診器目は裏窓に恋をする 晴芽
落書も幾世経ぬらん順礼堂 和三郎
落書を見るもなまに瞳で追いぬ 親生
面影に寄添う思出の言葉 烏雀
面影の中にその人の名を言わず ゆきら
理髪店の鏡に面影を拭かれる 紫蘭
掟と言う困いの中に自由があり 正夫
うっかりと掟のあった子供部屋 千淵

川雑 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

はいたたきいざればは少し逃げ 久米雄
生命保険に入つてやつと安心し 永流
一命はあずかかってある収容所 伊久野
笑おうか泣かうか命果てるとき 万女
夏やせの命焼酎子食うてつき 清春
小魚を提げて河童が帰つて来 一声
白い歯の見える河童よく泳ぎ 竜泉
河童みな帰るゆつくり日が沈み 東岸
酒屋の主人が甘党だからまだつき 秋月
幼稚園丈夫な虹の橋をかき 水仙
合併の村から町へ虹かかり 正州
虹消えた門にしよなまり施設の子 芳月
自慢する話へ夫の袖を引き 美音子
親と子のしよなま母は蚊をあおぎ 幸仙
親子してけんかの詫びをいに行き あやめ
親子でもこんな違う主義を持ち 柳風子
浄美

川雑 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼報

夏過ぎて色の白さへ尋ねられ 万世
時期過ぎてカキも失せて売れ残り 枝葉
カラーから覗く世間が別に見え 岳詩
アパートの部屋新婚の色で染め 秋月
金屏風松の緑の強く浮き 凡志
もう一つの方と比べて見る緑談 若草
もう一つ食べたて僕の胃を叱り みる
もう一つ云わたい僕を倦怠期 可住
何処かしらもう一つ足らぬ娘のいとし 美千代
もう一つ好かぬ相手と組になり まさ子
親馬鹿の頼みも一つ付け加え ひか平
白一色富士は気高き姿にて 無鬼
五六才若うして夫の色を選び 左文字

川雑 西宮支部句会 (西宮市)

若本多久志報

半端者祭になると呼び出され 正祐
受売りの中途半端な語尾となり 幸
あじさいの間に小さい庭の滝 静見
滝しぶきかかるとこまき寄つてみる 半歩
ソツのない商魂半端物でつり 泰
手花火に白いうなじのくつきりと 千尋
流の絵をかいて場末のビヤホール 三司
半端持って夕刊待ちかねる 一十
千丈の滝へ善心よみがえり 舟遊
食堂車むしようにカレーが匂い 弦月
流の音聞えてからの遠い道 すむ
後ろからくる足音の合う夜道 梅志
お揃いの土産二次会三次会 薰風子
お揃いで来いとは手紙の上のこと 甘美
お揃いの旅はあっさり帰つてき 静馬
三天帰揃って橋の渡り初め 三舟
袂はずしてみなお揃いの貸浴衣 牧人
学校で習ったカレーが出来るだけ 花美
水のない滝をガイドに詫びられる 満秋
お揃いの柄で妹がよく目立ち 多久志

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

聴診器調子を聞いて念を入れ 雄々
器量にはふれず氣立をいやにほめ 車葉齊
緑談に母娘の心くい違い 精耕
仲人の口はいいことすくめなり 青溪
緑談に妹ませた口をきき 無閑
縁談をきらうわけではない理想 幸子
久伸する子を励まして母も縫い 一保
義理でする通夜へ欠伸しきりなり 吾柳
この娘がと思えぬような大欠伸 節枝
縁談をまよめ銀婚式近し 三舟
きめた人あつても縁談耳を借し ユリ子
縁談のことで寮へ故郷の母 呼葉
豊作で縁談とんとん拍子なり 芋人
調子よく弾いて算盤赤字なり 一机

売り歩くわけにはいかぬ娘の縁談 素瓢
欠伸する間改札手をやすめ 翠月
一生をかけた娘の顔が出来 幸夫
話だけきめて葬式は秋にする まさよ

川雑 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

週刊誌ためてクイズに病んでいる 明朗
週刊誌めくれればヌード迫つて来 鶴声
二三種は立読みにする週刊誌 昌
夏休みアルバイトやせ世間知り 秀夫
夏休みブックに母も気がつかれ 佳夫
九月一日早よう来ないか子沢山 鶴声
もの好きが器を出して磨いてい 明朗
もの好きは小さい層も見逃さず 幸夫
もの好きの父は茶碗の垢を愛で 迷調子
久し振りですねと踊りからはずれ 佳男

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

恋も金も諦めています不精罷 一路
恋をして親に言えない金が要り 光郎
割り切れぬ少女の思想をもてあまし 魯木
孝行の少女美談の花咲かせ 素百々
夕やけこやけ少女の群へ黄昏る 味平

川雑 堺支部句会 (堺市)

八木摩太郎選

肩のこることから女愚痴を云い 徳子
散々に管をまかれて肩を貸し 雄声
切れ話外はいつしか風も止み 摩太郎
風便りとは信用の無い噂 貴山
素とことんにすつて競輪まだ未練 狂二
とことんの算盤びちり音を立て 太路
岡惚れがとことんまでの仲になり 好郎

川雑 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓選

正直に暮す五十を馬鹿にされ 紀人
 正直に列に並んで乗りおくれ 句念坊
 抵抗へ理牲で負けるとこまでき 白秋
 夕やけに明日はいいなと宿につく 蘇水
 馬洗う水静かなり夕やける 醉雀
 夕やけへカライフスルムが欲しくなり 蟠蛇
 夕やけへ麦わら帽子振ってみる 真津子
 カウボーイが馬で来さうなあかぬ雲 水容
 夕やけへ農夫の汗はまだ消えず 山里
 夕やけへ長勤の窓開け放す 青果
 扇風機買った嬉しさ客にかけ 杉木
 扇風機へ乳房も見える程にあげ 素人
 女房の化粧が長い扇風機 風舟
 待合の扇風機すぐあちら向き 蚊市
 厄年を友達そつとしておかせ 古城
 子に追われて仕事に追われ厄もすぎ 利子
 厄年を念入りにして厄の年 勘平
 厄年が何んぞと言って寺へゆき 木炭
 身上を喰って厄年去ってゆき 九笑
 厄年という一年が長すぎる 幸代
 厄年も貧乏人は振り向かず 俊一郎
 厄年を気味悪い程儲けてい 桂線
 厄年の不安 勧誘員に負け 温夫
 地下足袋で出る厄年の子を案じ 一人
 働いていたら厄年すぎていた 迷窓

川維 杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

一万円ちと多すぎる 持参金 一哲
 曲者と云われる女将あいせよし 小石
 曲者も寄る年波は争えず 一伸
 必ずしも曲者はかりでない 生々庵
 恋は曲者めぐり逢いたし 阿茶
 凡人の眼にくせものと見える腕 生々庵
 曲者と気付いた時は穴があき 阿茶
 曲者を使う曲者手を噛まれ 同
 倦意期先ず寝相からうとく見え 珊枝郎

和尚頼りゝ釈迦の寝相に似る王夫 同
 朝冷えに足で枕を深しあて 無名林
 達者な印だと床へ抱き入れる 同
 寝た時の布団に朝は誰も居ず 一伸
 大の字に寝て子供気がまだぬけず 小石
 端然と寝相が武裝解除せず 生々庵
 逃げ腰の席は立ちよいとこに占め 小石
 波く腰のほうも折詰の木着なり 同
 逃げ腰のほうも折詰を包んで 同
 忘れものしたと曲者戻って来 阿茶
 逃げ腰と見せてあつかり買ひ占める 生々庵
 逃げ腰は家内の手前だけでなし 同
 逃げ腰につけ込むようヒビをほり 太希志
 逃げ腰どころか政権にかじりつき 一哲
 逃げ腰で云い訳だけを云うて去に 太希志
 逃げ腰のくせに蚊とんぼへらす 生々庵
 結構です結構ですと靴をはき 無名林
 賑やかな寝相たのもし子 沢山
 口カビり調で寝ているティンエージー 阿茶
 パジャマ着て味もやしやりの寝相 同
 くせものは一目でわかる隙を 無名林
 裏返した蒲団着ている夜明け前 同
 逃げ腰は女房のヒスを理由にし 比呂史
 逃げ腰の手を持ち添え子 花火 同
 もてすぎて二度とよりつく気にならず 同
 逃げ腰を感じズバリと密附たのみ 同

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

橋本幸男報

宿題へ悲しい虫の夏休み 桃村
 台風はもう去にましたと虫の声 史葉
 辛抱して貯めたへむが付き初め 竹青
 キヌムして来た一人身の床を敷き 幸男
 眠られぬ程はドイツ語の格変化 夏生
 独身はパンツも洗いに出すと云う 方正
 独身になれて炊事の早いこと 安子
 仕来書ですましてやると恩にせせ 竹莊
 お茶汲みも役所で古い顔になり けい女

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻 圭水報

待たす程お役所は忙がしくなく ハナ子
 お役所は判とるだけの役があり 草右
 食事して役所返事せず 路郎
 泣いてくれる人もないさよ山登り 同

発起人義理の予約と気がつかず 好郎
 針仕事さすれば肩をこらす嫁 南宗
 針運ぶことにもなれた寮生い のほろ
 塩味は宿坊という味になり 貴山
 週末列車日本の狭き見て帰る 圭水
 週末列車パトロンも顔も居り 宏子
 週末列車気ばかり先きにゆき 句念坊
 週末列車次ぎ白浜にホック留め 徹也
 週末の列車は夢を乗せてゆき みなつき
 週末列車赤旗振つた顔して 狂二
 ウィーランドあつちで仕事して来る 路郎

333川柳会 (堺市)

駒谷どうり狩行

川村好郎報

どうり狩朝飯抜いた顔で 食い高志
 シミチヨロの方へ気がつくよう狩 一案
 どうり狩行つた証拠のこごき 好郎
 どうり狩熱し切つたる山へ入れ 貴山
 さびつた鉄に保証金取られ 冗歩
 一編成だけの新車を宣伝し 圭水
 用もないくせに新車を乗りまわし 南宗
 パトカーに追跡されている新車 狂二
 水旗なびく木蔭のよしず張り 句念坊
 騒音も忘れ木蔭にいるキャンブ 雪山
 電話なら有る隣に赤電話 新石

帝化川柳会 (大阪市)

佐野白水報

大掃除クリナーでは間に合わず 孝夫
 写真見ではんりの返意顔へ出し 善之助
 大掃除口喧嘩して早く済み 義雄

ヌード写真汚いものという女房 京一様
 大掃除月光仮面に邪魔をされ 甲子朗
 女房のへそくりあてに馬を連れ 本間
 日雇いのゆとり百円へそくりし 憲坊
 へそくりも遂に動員給料前 正一
 大掃除去年の釘で腰をむき 葉乙女
 一席はボケるとこが良写真 好祐
 こんな所にあつたあつた大掃除 一平
 へそくりおいて亭主へ恩に着せ 九柴
 男気のないアルバムで嫁く日待ち 雅堂

たけるへ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

パーマ屋がはやりお客は腹がすき 牛骨
 パーマ屋のサレビステレビ見せてくれ 消子
 逢いに来る予感パーマをかけ直し 一喜
 パーマから出てタイムで立ち止り 青柿
 コンナスト美女は果でない夢を抱き 素古平
 妻の背を流す男にある秘密 ちとせ
 断つた話が惜しい売れ残り 美沙
 決心を又にとらせている写真 只世
 質草の流れます日へ運ぶ針 美舟
 停電へ口説かれそうな身をかわし 賤女
 お彼岸も近し団子の味が増し 喜楽
 木の蔭へ来て一服の鎌を置く 山彦子

鮎と料理と酒

アベノ橋地下映画会通信

千日前 大劇裏

大萬

梅里の店
 ★大万川柳(第百五回)を募る
 兼題「出 発」 路郎先生選
 締切・十一月十五日 (句数五句以内)
 発表・十一月廿一日 (店内掲示)
 投句は 阿倍野区松崎町三丁目
 一〇 大万川柳会宛

11月の会

川柳雑誌社支部

所題時 14日(土)午後二時 寄付・大物・スリル・盆栽 浜田久米雄居	所題時 8日(日)一時 城・才女・極道 西宮市鳴尾町 新明和興業KK	所題時 8日(日)一時 夜遊び・かくす・気晴らし 米子市公会堂 日本間	所題時 26日(木)六時 赤帽・低姿勢・てれかくし 難波高架下 親和クラブ	所題時 22日(日)六時 生甲斐・めし・落葉 西成区玉出新町一ノ二 南和園 後藤梅志居	所題時 18日(水)六時 本籍・ピアノ・下請け 旭町二丁目 金塚会館	所題時 10日(火)七時 腕前・半分・大胆 市電玉造南百米 大阪信用金庫	所題時 2日(月)六時 わが家・女盛り・伍語 十三西之町五丁目東淀川郵便局	所題時 16日(月)夕 餅・塩見布・ガス・果ける 四糸縄手 仲源寺	所題時 20日(金)六時 酒・失恋・手内職 阪神西宮駅北出口スグ 西宮労働会館	所題時 22日(日)一時 お守り・悪友・パトロン 港町国鉄職員会館	所題時 22日(日)七時 恩人・隣・灯・裏表・末っ子 横山一声居	所題時 24日(火)六時半 頬杖・引越・無心 堺市九間町山ノ口八木摩太郎居	所題時 25日(水)七時 台所・釘・読書・イモ 高知市追手筋湖月 川竹松風居	所題時 27日(金)七時 自慢・枯葉・無駄足 南海本線諏訪森駅下車 諏訪森会館	所題時 弓削句会 月末(切)句会 愛嬌・褒める・愚痴・老ける 岡山県久米郡久米南町下弓削 四五四 直原七面山居	所題時 333川柳会 14日(土)六時 タクシー・幕間・オルゴール 堺市老松町三丁 島野工業株式会社
--	--	---	---	--	--	--	---	---	--	---	--	---	--	--	---	---

● 菊かおる月、日本人に香りがあるとすれば菊のようであってほしい。菊の君に桜の民といった時代もあったが、菊の気品は民にあってもいいではないか。例年のように路郎主幹は市民文化賞受賞者の選考委員をされるが、ことは文学畠からはただ先生お一人である。われわれ門下の誇りは高い。

▼ 短詩文学連盟の作品展も第三回を迎えます。まず飛躍一路にあることもうれしいことの一つである。

▼ 編集完了が二十二日という快調で月末には皆さまのお手元へ十一月号がお届けできるとおもいます。こんな号の徹夜は少しも苦にならない。

▼ 前号は好評だった。やっぱりはめられたと編集部の顔がみんな明るい。現金なものだ。そこで「今月もどうだ」と、自信をもっておくる十一月号である。あと一冊で新年号だ。また年賀広告にご協力ねがいます。

▼ 十一月は文化一色に塗りつぶされるが、伊勢湾台風は人災だと云う。これが日本の文化の泣きどころか。(一三夫)

柳人交歓年賀廣告を募る

新年号へあなたの年賀廣告を
 ★一口金二百円。幾口でも申込んでください。
 ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
 ★一口分は五分の一段組三行。
 ★原稿締切は十一月末日着便
 ★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

川柳雑誌社



みさき公園

よい子のおともたち

大西部少年フェア

9月27日～11月30日 主催 産経新聞社

自然動物園・自然水族館
 スポーツランド・ユネスコ村
 野外劇場・京大みさき臨海研究所

みさき公園駅下車 **南海電車**



結婚式場 長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場
 (和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか、貸衣装一切を完備しております。 ●6階

定休 日 金 休 日 土 休 日 日
 松坂屋 大阪日本橋三

・入門も奥義も「川柳雑誌」から・

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌
11月号発売中!! 100円(〒8円)

味噌は斜陽産業か
味噌の好みと技術
新清酒は分岐点に
新清酒の需要と価格問題

特集

食品工業とCMC
酵素と食品加工

◇海外情報 ◇特許告知板

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・香料等

大阪府北区本橋5-4-4
電話345231
食品と科学社 大阪6702番

新川柳鑑賞

麻生路郎著

好評噴々

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）
麻生路郎さんは明治三十七年か
ら川柳に手がけているというから
川柳の歴史はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載された
ものを中心にその他の雑誌や句集
若本多久志編 麻生路郎序

川柳親ごころ子心

親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い募めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余、実に有意義な書

からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧に注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがつていて、一氣に読ませる魅力がある。

定価一五〇円
送料二四円
上質B6版

価二五〇円
送料三二円
上質B6版
二五〇余頁

大阪府住吉区区内

万代西5丁目25

川柳雑誌社

阪神口座大阪75050

電話 大阪 6081

精神神経安定剤

一般名
メプロバメー



第一製薬
東京日本橋

アトラキシン

精神的緊張、不安を除去し、能率の向上に役立つ、就眠には自然の安眠をもたらす。筋肉緊張痙攣を除去し、肩こり、癲癇の特発性小発作等に有効。(説)(末)

printed in Japan

募集

課題吟募集

自惚れ (十句以内)

満期 (十句以内)

慾紙 (十句以内)

白力 (十句以内)

無化 (十句以内)

変力 (十句以内)

津田 (十句以内)

小浜 (十句以内)

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 三十四年 第十一号
定価 六〇円 (送料四円)

(禁轉載)
昭和三十四年十月廿五日印刷
昭和三十四年十一月一日発行

大阪府住吉区西五丁目二番地
行印刷人 麻生幸二郎

発行所 川柳雑誌社
電話 大阪 六〇八一
郵政口座大阪七五〇五〇

近作柳樽 (雑誌十句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春樹選
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定
●投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
●「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
●「課題吟」は誰でも投句が出来る。
●「川柳塔」の投句は不刊派会員に限る。

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和三十四年十一月一日発行(毎月一回一日発行)

編集 兼 発行 印刷人

福生堂 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西本町二丁目五番地 電話大阪六〇八一

原付口座 七五〇五〇番

定価六十円(送料別)

不眠 昼間療法!



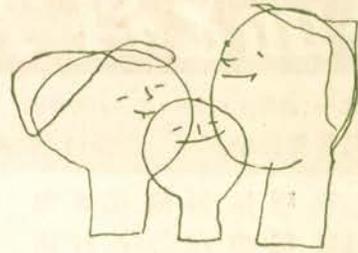
日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠
ができ、日中のイライラや不安感
もとれ、明朗・能率的な生活を送
れる習慣性のない安全な新薬です
スッキリした頭で作句の為にも!
晝はすつきり・夜はぐつすり

ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

一家そろってホーライ党

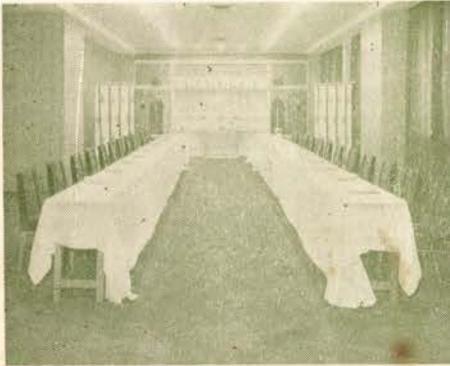


廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2

ウールタフトンが使用されています



大阪国際見本市会館ホテル
結婚式場



東京明治座二階通路

- | | |
|------|--------|
| 1帖 | 2,200 |
| 2帖 | 4,400 |
| 3帖 | 6,600 |
| 4.5帖 | 9,900 |
| 6帖 | 13,200 |

あ 装 各
り 飾 百
ま 店 貨
す に 店

タフトン

新しい じゅうたん

住江織物株式会社
株式会社 住興

大阪・南・安堂寺橋通4 (電話81~88)